

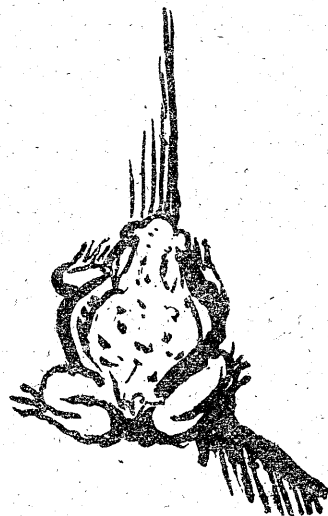
北辰會雜誌

第百五十六號

第四高等學校北辰會文藝部

北辰会雑誌

156



編輯後記……………(六)	文 劫回歸説に就て…長谷川 孫一郎(益)	論 て……………福 村 勲(壘)	作 頭 ゼノーンの運動否定論に就て	創 鰻……………室 伏 哲 郎(一九)	俳 句……………山 伯 幸 彦(二四)	短 歌……………伊 達 一 男(一八)	詩……………米 德 村 横 井 幸 雄(一)
					米 德 村 横 井 幸 雄(一)	米 德 村 横 井 幸 雄(一)	米 德 村 横 井 幸 雄(一)
					伊 達 一 男(一八)	伊 達 一 男(一八)	伊 達 一 男(一八)
					山 伯 幸 彦(二四)	山 伯 幸 彦(二四)	山 伯 幸 彦(二四)
					室 伏 哲 郎(一九)	室 伏 哲 郎(一九)	室 伏 哲 郎(一九)
					米 德 村 横 井 幸 雄(一)	米 德 村 横 井 幸 雄(一)	米 德 村 横 井 幸 雄(一)

詩

冬
心

徳
村
佑
市

あやしいものゝ私語にもにて

月の光りに雪がふりつむ

青白い夢のふるなかを

ひとりの少年がかへつて来た

肩にも雪をふりつませ

頭巾にも雪をふりつませ

しづかなしづかな夜の道

家も垣根もおなじ光にしづもらせて

口笛の音色も美しく

ひとりの少年がかへつて来た

爐

山田梁

すゝけた窓に

遠く海はけぶり

嵐をついて

鳥はむれとび

蕭條としてしろい野面のらをわたる

うすぐらい爐べに

鍋はくつくと煮え

冬も真近い漁村のひと日

くすぶる煙の翳に

腫はにぶく燃える

あゝたゝかひに失はれ

嵐を遠くふるびた爐べに

老の腫はにぶく光つた

午前二時のビルディング

米田清一

午前二時のビルディング

片側は星の光にうすじろく光つてゐるが

片側はまるで暗くて見えやしない

或る切斷心像

室伏哲郎

狂人の齒は悲しく光つて
死刑囚の獨白は
西風と共に荒涼と曠野をわたる
剃刀の様な晩だ
冷雨は執拗に寂莫の闇に注ぐ

Tom Tom Tom Tom

沈鐘のくぐもつた微かなうめき
銀色の晩秋の扉の臆病なきしり
蜘蛛の巢の朱の水滴の滴るひどき
光と影の宇宙立像の冷やかなる底鳴り

大脳灰白質の

目白押し細胞は

きりきりと一つの方向を探つて

孤獨の青白い臺に

私は私の歌を歌ふ

柿

横井幸雄

柿なり九月の柿なり

清々し青磁の皿に置かれたる幾粒か黄金の珠玉たまなり
豊醇に柔らなる曲線に水ぞ滴る。

雪に耐え寒にめげず十年も一年の如く

黒々と聳ゆるは一本の庭の柿の木

打震ふ裸木のきらぎらに花發き雲雀鳴く春にしあれば

夕月に芽をひらきおぼろに霞みぬ

葉みどりも深みじりじりと焼きつく日中

つぶらなる圓けき蟬の憩ひたる夏もし過ぎて

そよそよと梢行き交ふ涼風は

蜩の淋しき日暮

九月なりはや秋なりと告げぬ。

日の光蜻蛉の背に淡くまたよき
雲白く天高く澄める日
熟れにける秋の味覺は葉蔭はぐもに夕映映らす
百舌の聲さやかにして鋭き朝木に攀ぢてその幾何かを取り
清冽に浸して皿にあぐれば
秋の乾坤唯此の小さき實にこまれる如し
冷やくなるナイフもて
つやつやし薄皮をむきさくりと割れば
甘悲し秋の香は今漂ひぬ。

し
ぐ
れ

伊達 一男

野も山も

一面

たゞ霞のやうに茫とかすんでゐる。

時雨なのだ。

ごらん、あの沼にあちらこもらに次から次へと書かれてゐる輪を
静かに耳をすまして

聞いてごらん

あの枯れた黄色い「つてふ」の葉を打つ

サラサラといふ音を

遙かの村の灯が

淡く人懐しく燈つてゐる

私は時雨に濡れながら

じつと立つてゐた

若芽

米田清一

若芽新芽ならやくぬぎの木はだにも白き煙のまつはりのぼる
 にんじんの花の一むらけうとくもゆふぐれどきのむろぬちに咲く
 凍り果てし空を敲くは細竹の鞭でもあるか音が高かり
 地下鐵の信號燈の赤き灯が遠くに見えて近づかぬかも
 操車場のレールの列の並み光り車體いくつか動かすしづか
 壺にさすさくらの花の散る宵を時計はゆるく鳴り出でにけり
 與謝の海の中をかぎれる橋立の波打つ際に我が立てりけり

秋の砂丘にて

竹尾亨二

海ぞひの赤さびし線路にうす陽照りトロツコに砂の吹きつくる午
 沖を掩ふ入道雲に女歸きひるかたまけて波鳴り出でぬ
 響高く山峽を縫ひトロツコは夕闇深き湯町に着きぬ
 栗林踏み分け下りて山峽の藁ぶきの家にくるみを並ぶ
 川ぞひの柿の實赤く熟れてゐてそばの花ゆるく土手を駈け下る

友爆死せるに

思ひ出を壁に痴れ書き川ぞひのひまはりを見て泣きゐたりけり
 君の名を板に彫りつゝ呼びにけりナイフの双粗くこぼれたる午
 鬼來れば島田の結のうしろ見せて石燈籠の蔭に逃げたる女
 裏藪に紫の花咲き出でゝ母は指さし木蓮といふ

じやのめ草

鈴木政之

二すぢのわだちのさきは雪どけの道きはまりて白銀ぎんの山の秀は
 あられつむ路つぶつぶと靴底にふむ夜吾れは家に歸りたり
 畝底に眠れるひきの土くれに打たれてしぶとき眼開めけたり
 黒きしべのこゝろを燃やすじやのめ草は黄に開きたり眞夏の晝を
 ペンキ塗りのトタンの小屋に石油湧くにほひのむれて夏雨そゞぐ
 赤茶けて細々とおつ赤さびし管ゆわき落つあぶらの流れ
 浚いり日さす妙義ヶ嶽ゆ湧く雲の眞柱なして朱と燃えにけり
 稻妻とたゞくあられの白けくも横ざまにしてとゞろきにけり

からたち

黒川正則

からたちには張りさびれたる蜘蛛の巢のひだゆれやまず秋陽さしつゝ
 手にとればコーヒカツプに透か影ゆれぬあかあかと日の入りゆく夕
 かうかうと細篋をゆく風を心むなしくひたところ聞け
 しどろにもたれし黍の葉うすでりに蜘蛛いがきつゝ顫かひけるかも
 秋草の光たむろに群るゝ蛾のまばたく光かは消ゆらくも見えず
 山鳥の聲のほろろのひまひまに幹放つらし遠鳴りきこゆ

羽根音

飴山實

夜通しの豪雨は霽れて庭隅の松の花粉は地に流れぬ

午後の陽の照りのきびしき沼際にさゝ蟹の爪赤く干せるぬ
瓜棚はなほ雨粒の雫せどばやしるゝと庭石乾く
母の怒りとたゝかふ充奮おさへつけ赤きカンナにしばし向へり
笹の根に月光透ける垣の外をさくく歩み人去りにけり
時雨つゝ日暮間近き空低く羽根音たてゝ鴉過ぎけり

雑詠

清水敏治

粉雪降る夜の静寂を遠々とこだまも長く汽笛響きぬ
片耳を外面に出だし長々と兎は横になりてゐたるも
風落ちし春の眞晝を荒川の堤に燃ゆる野火のひそけさ
朝な朝な立出でゝ見る庭隅の三うねがほどのじやがいの昌
雨蛙杉の梢に登り行き夕べ涼しく風吹き出でぬ

新緑

伊達一男

初夏の陽の輝くセメンの石段にかすかに棕櫚の花の目にしむ
山吹の咲き咲き垂るる大淀に白き菜一つ動かむともせず
栗原やはつはつのびて陽に映ゆる若葉の色を遠く見つくす

高野紀行

畑尾尙雄

大塔の丹色まぶしく立ち入りし御堂暗きにまぶたを閉ぢぬ
静やかに秋陽はさして石の上にぬぎたる草履の色をしたしさ

縁 蔭

佐伯 孚治

ゆれながら牡丹は卓に置かれたり
縁蔭にグリムの繪本母子眠る
葦の角水を破りて鏡り出づ
水切つて泳ぐ子に岩うづくまる

雪の句ひ

飴山 實

玻璃暑し爲す事數多ある机

京都二句

時計臺の色浮き出でぬ霧の街
京の霧を深々と呼吸しありしかな
雁啼くや厚き手紙の届きけり

親しく交はりてありし故郷の人遊く

死すといふ一語や秋の蝶疾き
バーの隅巨漢の咳のまだ止まず
買ひし本又賣り入日寒き坂
おとがひを上げて冬月見る處女
薄日ある湖岸を牛曳きゆけり
雪に匂ひありしといふ娘歌ひ出しぬ

鈴懸

水を遣る人も小萩も吹かれつゝ
ほけの花小使室のひるさがり
夜店たゞむ鈴懸の葉の黒さかな

山崎勉

風光る

小使白兔の眩しさと居りし夏休み
眞晝の客間静かに花と待つひととき
風光る草原に目を細む白き犬と

矢守一彦

寒

魚籠の籠目正しく鐵橋に夕日
砂に焦けしひるがほとねて海光る
川原の根笹あかあか網たゞむ男

松永亮一

大南風我が息細く咳入れり
寝不足の頭きんと張り寒に入る

つた

横井幸雄

客出でゝ氷屋のたなつたかげる

つたのびて 麥藁帽の白さかな

大 霞

根 岸 晃 六

大霞町を離れて家のある
水漬ける鉢に田螺の乗りて居り

創 作

文 藝 部 賞 入 賞 作

鰻

室 伏 哲 郎

(一)

奥箱根の方角から遠雷が近づく氣配だった。
十國峠から外箱根の山廓にかけて、一面の黒雲が湧
く様に南に移動して居た。

湯上りの手拭を掛けた欄杆の立ちならんだ川並みの
温泉宿の下水口から、藤木川に流し出す湯の煙がさあ
つと南に靡いて、灼けつく様な日射しが急に翳りはじ
めた。

濃くなつた樹陰の間に、油蟬の聲がふつと遠のいて、
ひぐらしが思ひ出した様に啼きはじめると、縁端が細
く銀色に輝いた黒雲は海の方へ擴がり乍ら、細長い山
峽の温泉町を迅速に呑んで了つた。

黒雲の底で、人々は何かわめき合ひ乍ら、慌てふた
めいて、銘々の棲家の窓や戸を蝸牛の様に固く閉ざし
た。

ばたばたと戸を閉める音が狭い谷間に反響し、低い
黒雲にはねかへつてせはしく響いた。
たゞ此の慌しい雰圍氣の中で、小さな川原の一軒家
だけが、手製の作り窓を開け放したまゝ、間の抜けた
様に静まりかへつて居た。

冷い風が颯と鳴つて岩の多い川面をかすめると、軒
端に吊したこればかりは不似合に大きい祭禮提燈が弾
む様にゆれた。
大粒の前觸れが、小さな庭にのんびりと乾し擴げて

ある蕎麥の筵を手荒く叩きはじめた。

ひでりで乾き切つた白い庭土の面が、叩きつけるな
じまない雨滴を、くるくるとまるめこむのも一瞬の間
で、黒々と雨水を吸ひ込んだ庭は、もう烈しいしぶきを
をあげて踊り出して居た。

棒の様に雨を御して、川沿ひの竹藪を二ゆすりした
横なぐりの風は、低い縁の下の微臭い匂を吹きあげ
て、烈しい雨に叩かれたまゝ、開け放しになつて居るト
タン葺きの小さな家に容赦なく吹き込んだ。

閃、一閃、鋭い稲妻が暗い雨脚を白くきらめかし
た。

(おんや?)

烈しい雨音と、顔をひやりと撫でる冷たい風に暖い夢
の國から、次第に追ひまわられて居た萬吉爺は一閃の
閃光に充血した牛の様な眼をきよとりと見開いた。

晝寝から覺めた何時もの癖で、大きな厚い手の甲で
ぶるんとだらしなく涎をぬぐひ乍ら次第に纏つた鈍い
腫を外にすると、彼は狼狽してわめき乍ら、ござり
と起き上つた。

「大變ぢや、雨だ、大雨だわい。」

赤茶けて、へりのとれた畳の上を、大きな脂足でべ
たべたと踏み廻つて、東向きの縁側のガラス戸をごと

ごとと閉め南と西のあげ窓のつゝかへ棒を慌てゝはず
した。急に部屋の中は暗くなつて、外の烈しい雨音の
天地から、此の小さい小屋を人間臭く限つた。

萬吉は薄暗い敷居際に懐手をして突つ立つたまゝ、
(こんなひでえ土砂降りぢや何かもつと用がありさう
なもんだ)

と思ひながら、黄色い亂杭窓の口を開けてぼんやりと
ガラス戸の外を眺めた。

白い雨が竹の棒に蔓をからめて狭い庭へ五六本植ゑ
てある南瓜の大きな葉を裂きさうに叩きつけて居た
し、これはた樋からは太い水柱がざざざと眼の前を
落ちて居た。

水柱は彼の眼の届かない軒下に吹きとばされた祭禮
提燈を無慈悲に土まみれに轉がして居た。

絶え間なく續く水柱の行列と南瓜の葉の急テンポな
運動から眼を離してふと庭を見ると、水を一杯に吸ひ
込んだ筵の上で、黒い蕎麥の粒が烈しい雨脚にからみ
つく様に躍つて居た。

「ありや。」

萬吉は仰天して、一瞬どしやぶりの空を恨めしさう
に仰いだが、思ひ切つて禪一つになると、ガラス戸を
開けて縁からとびおりた。

、強い雨が胡麻塩頭を馬鹿みたいにびしびしと叩い
た。

何か塩っぽい水が頭から流れ落ちて來、禪はすぐ、
ずぶずぶに濡れ通つた。

彼は筵をどうして持つて行つたらよいか一寸の間躊
つた。が、次の瞬間、きらめいた稲妻がいきなり眼の
中にとびこんで來た時、慌てゝ筵の兩端をおさへてう
んと息ばつた。

それは馬鹿力の彼にも相當の重さだつた。

持ちあげると筵の兩端に水を吸つてくつゝいて居た
五分ばかりの厚さの蕎麥は急な傾斜を滑つてばさばさ
と曲がつた筵の底に溜つた。

水の流れる筵をまるめ込むと、兩手で臍の上にのせ
て、よちよちと運んだ。

突然、ぐわら、ぐわらと烈しい雷鳴が、邊りの空氣
をゆすつた。

萬吉は思はず、びくりとして首をすくめた。

とたんに筵は斜になつて蕎麥はいゝ加減水浸しの庭の
上にこぼれた。

片足で臺所の戸を辛うじてこじ開けて、筵を土間の
上にどさりとおくと、彼はぼつととして其の場にしゃが
みこんだ。

こぼした蕎麥が雨に叩かれて居るのを彼は残り惜し
さうに見て居たが、それでも、臆却なので腰を上げよ
うとはしなかつた。

然し、低い下水に向つて流れゆく水と一緒に移動し
て居る三角の蕎麥の粒をぼんやりと眺めて居る内、彼
は電撃の様に午前から山の開墾地へ行つて居た女房の
お兼のことを想ひ出した。

口やかましいお兼に怒鳴られる處を想像すると萬吉
はバネ仕掛けの様に立ち上つて、未だ烈しく降り續い
て居る雨の中に飛び出して水浸しの蕎麥をしやくひは
じめた。

(二)

(田圃や茶物にはいゝ、雨だが今晩は宵宮だに)

萬吉は素つ裸の儘長煙管でかんばの葉を吸ひ乍ら少
し勢の弱くなつた雨脚を眺めて馬鹿に火照つた身體を
冷して居た。

(此の降りぢや、山車や神輿の小屋は雨漏りで、飾り
もんも臺無しづら。)

彼は、町役場から頼まれて、木戸の旦那の寄附金を
使つて自分が建てた葺簾張りの小屋のことをふと考へ
ると首をすくめた。

紅白の飾り布一まき。

工事場から盗み出した品物は大したものではなかつたが、小心な萬吉は此の四五日の間しよつちうびくびくして居た。

(そりやわしたつて娘が東京から歸つて来るだから、布團に被せる布つ子は欲しかつたさ。んだつて盗むなあよくねえ。お兼の奴がけしかけるからいけねえだ。俺あ嫌だつて言つただに。)

横眼で部屋隅の隅に積んである紅白の布團を見ると何か忌々しいものがこみあげて来て、彼はやけに煙管をぽんぽんと叩いた。

然し、お兼に怒鳴られ乍らこびき廻されることを考へると又意氣地なうなだれて、大人しくかんばの葉をつめ替へた。

外を見ると雨は急速に小止みになつて空は大分明るくなつて居た。

萬吉はガラス戸をがらりと開け放して、未だ霧の行き來の激しい川向ふの山を眺めた。

あの山の中をお兼がびしよ濡れになつてぷりぷり怒り乍ら鉄をかついで降りて来るのかと思ふと萬吉は何となく愉快になつて鐵だらけの顔でぐすりと笑つた。雨がぱたりと止んで雲の切れ間から日が照り出して來た。

川原の僅か許りの砂地に作つた薩摩芋の葉にたまつた水滴が一齊に美しくきらきらと光りはじめた。

何時もは川沿ひの丈高い雜草に隠れて見えな藤木川の流れも、谷あひの川の特徴で、夥しく水量を増して山土を流しこんだ茶色の水を、對岸の竹籾の下石垣に激しく押し迫らして居るのがよく見えた。

萬吉はのびあがつて口を開けたまゝ、ぽかりと茶色の川面を見て居たが、突然何か思ひついた様に雀躍りして手を叩いた。

(さうだ。一番大事なことを忘れて居たわい。鰻！鰻！長い日照りで海の入口でうろろして居た鰻公もこの水で待ち兼ねた様にあがつて來るぞい。)

彼は縁に腹ばひになつて、ごそごそと縁の下を手探つて居たが、やがて一本の可成り大きいどうを取り出して縁にのせた。

それは細い割竹と棕櫚繩で徑一尺、長さ五尺程の一方が尻つぼまりの筒狀に編んだ、此の地方でよく用ひられる鰻捕りの道具だつた。

割竹にたまつた土埃と、其の間に張つた蜘蛛の巣を拂ひ落し乍ら彼は大鰻が筒一杯に這入り込んだ處を想像して子供の様に胸をわくわくさせた。

(これへ一杯入れれば、いゝや半分としたつて二貫から

二貫五百はあるぢやろう。さうすれば一貫二百圓で別荘や旅館へ賣れるとすれば……)

彼は左手を出して、右手の煙管の先でゆつくりと指を折つた。

「四百圓か。二貫五百なら、えゝと二貫五百なら、多分五百兩もんぢやぞ。」

彼は思はず獨りごとを言つて了ふと、もう大金が眼の前に轉りこんで來た様に、幸福さうにうつとりとして、どうを撫でた。

丁度其の時、裏手からびたびたと氣ぜはしい足音がして

「どつこいしよ。」

と暖聲で何か重いものを地べたに下す音がした。

(お兼だ。)

萬吉は何とはなしにびくりとして楽しい夢がぶちこはされる様な氣がした。

ふと自分が未だ、きよろりとした素つ裸であるのに氣がつくと彼は慌て、押入れから下帯をとり出した。

お兼は持つて來た鉄を投げ出し背負つて來た薪を背負子から下して亂暴に裏手の羽目板の傍へがさがさと積むと尻切草履をひきづつて表へ廻つて來た。

雨と汗でびしよびしよに濡れて疲れ切つた彼女は、

ぽかりと氣樂さうに縁側に座り込んでどうを抱へ、其の癖何だかおどおどして居る大男の連合を見ると急に毒吐き度くなつた。

「何だわりや、子供みてえにどうなんぞ抱きくさつて。はや仕事は済んだのかえ。」

「ううん。今日はな、……その祭前で新分譲地の工事は止めたよ。」

日の下で湯氣の出で居る着物を脱ぎはじめ居たお兼は手を止めて眼を光らせて萬吉を睨みつけた。

「何イ。それぢや、わりや錢も稼ぎつこなしで家に居くさつただな。甲斐性なしつ。わしを見な、わしを。午前ひるまえに十坪程開墾して雨がざぶざぶ降る中あ燃し木のえけえのを三把背負つて飛んで來たわな。」

晝辨當を食つた時以外ずつとひる前から晝寝をして居た萬吉は恐れ入つて黙つて息を呑んで居た。

(鰻はもういゝ加減川をのぼつゝら)

彼は頭の隅で鰻のことをぽんやりと考へて居た。

「？」

お兼は土間へ一足踏み入れ様として、足下にぐしよりと躡つて居る筈に氣がついた。一寸まくつて見てそれが何であるかを知ると、彼女は齒を剥き出し、恐しい動物的な形相をして、吼える様にわめいた。

「ありやうやう。何だまあ此のさまあ。」

年齢の割に馬鹿に派出な腰巻をしたお兼は縁側にうすぼんやりとおすおすし乍ら坐つて居る萬吉の處へとんでゆくと、平手で力一杯亭主の横面を張りつけた。

「阿呆！ 頓馬！ 間拔！ 馬鹿！ 甲斐性なしつ！ こん畜生！」

あらゆる呪咀の言葉が彼の顔面に叩きつけられると同時に、しなびた乳房の上で烈しくお兼の手が動いて萬吉の頬に左右から続け様のびんたを喰はした。

萬吉は牛の様な眼を閉ぢて濟まなさうにどうをかへて縮まつて居た。

お兼は腸が煮えくりかへる程口惜しかつた。今晚は宵宮だし、娘のお春も東京から暇をとつて歸つて来るしするから、久し振りで大好物の蕎麥を喰はうと思つて居たのに。開墾で苦しい汗を流し、肩に喰ひ入る様な薪を背負ひ乍らも蕎麥のことを考へたればこそ元氣が出て來たのに。

何たる薄馬鹿の……何たる間拔けの……

「こん畜生！」「こん畜生！」と言ひ乍らひつばたき續けて居る内彼女は腕が少し疲れて來ると一緒に口惜しい、癢だと一途に思ふ心の何處かにふつと妙な氣持が湧いて來るのを感じた。

射しを送つて、萬吉は鼻の頭に汗をかいて居た。額も汗ばんで來て玉になつた汗が荒い横皺をつたはつて頬の上を滑ると先刻お兼にひつばたかれたあとがひりひりとしみた。

臺所ではごろごろと棒を轉がす音がしてお兼が矢張汗をばとばとこぼしながらうどんを打つて居た。

「ちつと、やつこい様だな。」

石油罐から、欠け茶碗で黒つぽい粉をしやくふと平らにのびた帯の上へばらばらとふりかけて、彼女はそれをくるくると丸めた。

狭い臺所の酸えた様な蒸し暑い空氣の中をわんわんと銀蠅がむらがりとんで居た。

其の上にとまつて居た一群の蠅を追ひたてる様に庖丁をとりあげると彼女はうどんを切り出した。

氣ぜはしく小刻みに庖丁を動かし乍ら土間のぬれ筵をじろりと一瞥すると蕎麥の食へない口惜しさが又どつとこみあげて來て、お兼は舌打ちをして唇を嚙んだ。

丁度其の時、表で華かな弾んだ笑ひ聲が、萬吉の胴間聲に交つて聞えた。

（お春だ！）

彼女は庖丁をほうり出すとありあはせの下駄を突つ

それは、自分の亭主の餘りの不甲斐なさに對する一種の頼りなさの様なものでもあつたし、心に描いて來たお春との楽しい晚餐を臺無しにされた寂しさの様なものでもあつたし、又その何れともつかない様な變てこな氣持だつた。

何かうら悲しい様なものがこみあげて來て涙が眼の奥に湧いて來さうに思へたので勝氣な彼女は氣をとりなほして最後に強く一はたきすると荒つぽく言つた。

「お馬鹿つちよめ！ 氣をつけれ！」

（三）

庭の隅のごみ捨て場で萬吉は一心に鰻のおびき餌にするみずを堀つて居た。

木片で濕つた泥を不器用にほじくると朽ちた落葉や腐つた野菜屑の間に縞の入つた小さな奴が毬の様に群をつくつてかたまつて居た。彼はそれを太い指でつまむと、もう底の方に大分溜つて居るがんがらの中へ投げ入れた。どうかするとみずは罐の内側をはひり縞の身體をのばして外へ逃げ様としたが、萬吉はそれを見るとき口を尖がらして「しつ、しつ」と言ひ乍ら罐を片手で握り、底をばこぼこと石の上で叩いてみずをこそげ落した。

もう四時に近かつたが、夏の日はまだ可成り強い日

かけぼろ簾をはねのけて表へとび出した。

明るい日の下に立つて居る、ツウピースのびつたりと身についた洋髪の娘をまぶしさうに見あげると彼女は皺だらけの顔をくしやくしやと綻ばせた。意地の悪さうな眉間の皺は文句なしに消えて了つた。

「まあ、まあ、春や。」

彼女はやつとそれだけを言つた。

「俺はな、はじめは何處のお別莊のお嬢さんかと思つただよ。」

萬吉は眼を細めてそれでも精一杯に月並な洒落を言つた。

何時もなら萬吉の言葉等氣にもとめないお兼も

「ふんとになあ」

と感に堪へた様な面持で深く肯いた。

「さあ、さあ、早く家へ入りませうよ。暑くつて仕様がなわ。」

娘は疊んだ桃色のパラソルと大きな手提袋を持つて、さつさと歩き出した。素足に履いて居た塗下駄を亂暴に脱ぐと、身輕に縁側に上つて横ざまに足を投げ出してブラウスのボタンを外しはじめた。

萬吉とお兼が縁の上に上つて來ると、お春は手提袋の中からクリーム色のハンドバックをとり出し、それ

を膝の上でパチンと開いて赤い紙入れを二人の眼の前に投げ出した。

「お給金よ。」

お兼は一寸眼を光らせて、紙入れを押し戴いて開けた。うどん粉臭い骨ばつた指で百圓札の束をひき出してから、もう一度念の爲紙入れの空の底をのぞいてみて、彼女は震へる手で金を數へ出した。

「二千圓あるの。先々月のはじめ、ダンサア皆でストライキやつてチケツト代あげさせたのよ。だからほんとはチツプもあはせて五千圓ばかり稼いだんだけど、三月も東京でアパートに居れば三千圓位すぐふつとんぢまふわ」

娘は得意さうに小さな扇子で鼻の頭へ風を送り乍ら言つた。

「さうとも、さうとも。」

お兼は娘が使つて了つたと云ふ三千圓の金にいくらか未練を感じたが、眼の前で握つて居る二千圓の束を見直すと眼が眩む様で文句なじに肯いた。

「妾ね、ほんとはその中から靴買ったかつたのよ。今迄の靴、もう駄目なつちやつて、今も修繕にやつてあるんだけど、修繕屋が凄くポルの。だから一層のこと商賣道具だから新しいの買はうと思つただけど、

八百圓だつて言ふんでしょ。いくらなんでも手が出なかつたわ。」

お兼がびつくりしてそろそろと札束を握つた手をひつこめ様としたので、娘は笑ひ出して言つた。

「大丈夫よ。おつ母さん。靴なんか買やしないから。又其の内誰かに買つて貰ふわ。それ全部おつ母さんとつといてよ。お小遣ひは不自由しない様に持つてるの。」

お兼は安心して又丁寧に押し戴くと、押し入れをあけて、奥の方から小さな壺を取り出してその中に収めた。

然ししばらくするとお兼は壺をひつくりかへして一旦入れた錢を又一心に勘定しはじめた。

娘は手提袋の中から外國煙草の箱をとり出し、其の中から一本ひき抜いて火をつけた。

ぽかりと口をあいて娘の吹き出す煙の行方を見て居る父親を切長の横眼でちらりと見ると彼女は言つた。

「お父つつあんも吸はない？」

萬吉は何だか吸ひ度い様な気がしたが、横つちよでお兼が睨んで居る様子なので黙つて、もじもじしてよい香のする煙の中でだゞ小鼻だけをびくびくと動かし居た。

お兼は萬吉が吸ひたさうな顔をして居るのを見ると急に腹が立つて言つた。

「とんでもねえ。おとつあんななか、吸つたら罰があたりあね。お春が稼いで来たもんはお春のもん。お前さんはかんばの刻んだのが未だあんだろ」

さう言はれると萬吉はそれもさうだと思つて、黙つて了つた。

娘は部屋隅に積みあげた紅白の布團の上にシュミーズ一つで腰をかけると口笛を吹き乍らハンドバックから出した男文字の手紙を読み始めた。

萬吉はみまぢ掘りの續きに庭に降りお兼はもう一度錢の勘定をやりはじめた。

(四)

山の端に太陽が沈むと谷間の町は急に暗くなつた。細長い街一勢に灯がぼつとはいつた。

急テンポな祭の囃子の音が、聞えはじめて人々の氣分を浮々とさせ、祭禮提燈が夕方の微風に幸福さうに揺れて着飾つた人々の横顔を照した。

長い戦争の後で、はじめての夏祭が温泉町らしく景氣よくはじまらうとして居た。

お春は共同温泉の暖簾を身軽にくぐつて人通りの多くなつた縣道へ出た。

夕飯前だつたのですぐ家へ戻らうと思つたが、ふと帯の間の手紙を觸つてみて彼の家へ行つてみる氣になつた。(どうせ今夜遇へるんだもの)とは思つたが彼女は思ひ切つて、お宮の方へ下つてゆく人々の流れに逆つて歩き出した。

意氣な柄浴衣を着流して、湯上りの小桶をかゝへた彼女の仄白い顔に行き過ぎの若い衆達は暗い處から口笛を吹いたり威勢よく「ほうーい」と聲をかけたたりした。

明るい水屋の店の中には子供達が群つて、赤い氷水を呑んだり、ヨーヨーを廻したりして居た。ふくらまして口から離すと「ぶらーつ」と奇妙な音を出す風船を持つた子供達が道に出した縁臺のまはりをぐるぐる廻つてぶざけあつて居た。

交番の四辻の所で左へ曲ると縣道よりも立派なコンクリイトの廣い道路が人氣もなく山へ上り氣味に續いて居た。

邊りは土地の人が「文化村」と呼んで居る別荘地帯で、黒々と續いた兩側の石垣の奥にひっそりと静りかへつた大きな家々には落着いた灯が深い植込み越しに、澄まして灯つて居た。

たゞ一軒、右手の夜眼にも白く馬鹿に大きい標札の

出て居る家から陽氣に三味線の音が聞えて、時々野車な笑聲が遠慮なく聞えて來た。
肉を煮る匂が美味さうに道路迄流れ出して來て居た。

お春は舌打ちをして

（木戸だわ。戦争中は海軍の御用商人でうまくやつて居たと思へば、今は又、進駐軍の土木の請負かなんかやつて立廻りの上手な奴）

と思ひ乍ら羨しさうに垣の隙をのぞく様に歩いた。
植込みに隠れて、中はよく見えなかつたが三味線にあはせて酔つばらつた太い聲が下車た唄を歌ふのが聞えた。

けたましい女の嬌聲が卑しく其の間に交つた。

やがて、歌聲も遠くなつて、新しく工事中の新分譲地の立看板が道の突き當りにぼんやりと白く見えてくるとお春は流石に胸が躍つた。

道の左手の一番奥の洋館が彼の家だつた。

立停つて二階を見上げると、今夜の書齋は電気スタンドもつかずにひっそりとして居た。

たゞ横手の湯殿には暗い灯がともつて、誰か温泉に入つて居る様子だつた。

お春は凝つと家の中の氣配に耳を澄した。

がやつとおさまつた處で、お兼も萬吉も、お春の顔を見るとほつとした様に唾をのんだ。

待ちかねた、うどんの夕飯がはじまつて、お兼は又くどくどと蕎麥の打てなかつた原因を説明し出したが、お春は、上の空で聞き乍ら、つるつるとうどんをのみこんで居た。

萬吉が鰻のことを夢中で考へ乍ら、うつかりと井のお代りを出して。お兼から睨まれた時、古時計がゆるぐ八時を打つた。

(五)

十國峠の黒い峰の上にカシオペアが明るく輝いて、銀河は北から南に美しく流れて居た。

萬吉はどうを大事さうに抱へて、夜露で濡れる草叢の道を冷飯草履でひたひたと歩いた。

遠く縣道へ出る邊りにお兼の提燈が小さく明滅して見えた。彼女はお春が自分と一緒に祭にゆかずじりて出掛けたので臍を曲げて、家にねて居たが、九時になつて萬吉がどうをかけたにゆく時になつて、芝居見たさにやつと腰をあげて行く氣になつたのだつた。

お宮の上邊り一帯はぼうつと明るくなつて、モノトナスな囃子の音が絶え間なく聞えて居た。

草叢の道を左に折れると尙草深い小道が川雲で眞直

遠くの離れの方で當主の老人らしい咳ばらひが聞えた様な氣がした。

山から吹き下した風が湯上りの若い女の匂を夏の夜の路の上へ惜氣もなく散らした。

突然誰か浴槽から上つたらしく、ざーつと湯のこぼれる音がして稍甲高い男の聲が湯殿に反響して聞えた。

「ねえやさん。剃刀を持つて來て下さヨ。」

（あのんだわ。）

彼女は思はずどきりとして闇の中で眼を凝した。上から木立が被さつて廣い曇硝子のはまつた浴室の中は見ることが出来なかつた。然し彼女のアパアトへよくやつて來た、あのほつそりとした華奢な白い身體が裸體になつて二間と離れないガラス戸の中に居るのかと思ふと、何か新鮮な胸のときめきを感じて、彼女は息苦しくさへなつた。

呼びかけようと思つたが、ふと氣がつくと、右手の別荘の勝手口から、女中らしい風態の小娘がこちらをじつと迂散臭さうに眺めて居たので、舌打をする、（もう一時間程の辛棒だわ）

と思つて、さつさと縣道の方へひき返して行つた。

家へ歸ると土塗れの祭禮提燈を中においての一閃着

ぐに續いて居た。

萬吉は股引をどつぷりと濡らし、草をかきわけて、やつと川原へ出ると急に瀬音が高く耳を打つて、眼の前を黒々と待望の川が流れて居た。

水のひくの待つて居たので、巾三間程に頃合ひの流れが岩の間を靜かに流れ落ちて居た。

さらさらと流れ落ちる水の中で、あの黒々とした精力に充ちた三角頭の大將共が瀬から瀬へ岩の間を身をくねらせてぐいぐいと上つて來る。

それをこれから捕へるのだと思ふと萬吉は生命の底から期待と歡喜がこみあげて來てぞくぞくと武者ぶるひした。

谷間へ下りて、岩から岩へ乗り移り乍ら、星明りに透かしてみても、彼はどうをかけるに都合のよい場處を探した。

上は川並の温泉宿から熱湯を流し出して居りおまけに小さな堰があることを知つて居たので、彼は下へ下へと場處を探つて歩いた。

淵が渦をまいてから、岩と岩の間を流れ落ち、それが又ゆつたりと洗んだ淵を作つて居る様な眺へ向きの場處はさう容易くは見付からなかつた。

對岸の竹籬は此の邊りより切り立つた崖に變つて見

上げる。此方岸はぐるりに唐もろこしを植えた川原一面の薩摩芋の畠だつた。

人氣の無い川原は無氣味な迄に黒くおし黙つて居て、岩から岩へびたびたと前屈みに傳はつてゆく萬吉の足音も牙え切つた瀬音にすつかり吞まれて了つて居た。

地球の底の底の暗い小さな皺を傳ひ乍ら一匹の人間が餌を求めて音もなく蠢いて居た。

萬吉は左手で抱へて居たどうをもちかへてから、腰をとんとんと叩いて、ほつと息をついた。

(おんや?)

彼は腰を叩く手をやめて、凝と耳を澄ました。何處かで何か囁く様な聲が聞えた様な氣がしたのだ。

(野荒しかも知んねえど)

萬吉はごとりと唾を吞むと、岩の上に突つたつまゝ眼を閉ぢて大きな福耳に手を當てた。

軽い風が岸の上の唐もろこしの葉をさらさらと鳴らして通り過ぎた。

遠くの遠くの方で囃子の音が續いて、緊張した鼻の神經は鋭く夜の匂を嗅いだ。

今度は、はつきりと若い男が熱っぽい調子でささやく聲が五六間先の芋畠の中で聞えた。

男の聲の終らない内に、忍び聲でくつくつと笑ふ女の聲が艶かしく萬吉の耳朶をうつつた。

(夜ばひだ)

彼はかう直感すると、わけもなく血が頭に上つて来て、どうを抱へたまゝ岩から川岸へとび上ると、身體をよたよたと揺すつて

「此の野郎共!」

と大聲で怒鳴つてみた。

畠の片隅で黒い塊がびくりとした様に非鳴をあげ乍ら二つに分れて横つとびにとんだ。

唐もろこしを押し倒して、風の様に過ぎ去つた後の闇をすかじ乍ら萬吉は茫然と立つて居た。

ほろ苦い後悔に似たものが鈍く心を刺した。

近附いて見ると、そこだけ畝が柔かく崩れて、芋の葉がしどけなく亂れて居るのが夜目にもはつきりわかつた。

——二匹の獸が蹲つた後の様に——

それを見凝め乍ら、彼は魯鈍な頭の中で、四十何年も前の自分の姿を想ひ出して居た。

(たしか日露戦争の凱旋の祭の晩。あれも矢張り度今時分、わし等も此の川つぶちで長いことさゝやきあつて居たものぢやつた。あの頃は、わしも若かつたけが

お兼も未だ十八九だつた。わしはあの時……)

そよそよと鳴つた声、お兼の未だ頬のふくらんで居た可愛かつた顔。白い胸。熱い息使ひ。はじめて聞いた可憐な心臓の音。声の間から見上げた星の輝き。遠くで聞えて居た祭太鼓の音。萬吉の頭を色々の想ひ出が次から次へと浮んでは泡の様に消えて行つた。

素足をチクリと刺して耳元を蚊がぶーんと大きくうなり乍らとんだ。

刺されたあとをびしやりと叩いて

(あの時も蚊が居たつけ)

とふと思ひつくと皺だらけの顔に寂しい微笑が浮んだ。

(あの時と)

萬吉はぼんやりと考へ込んだ。

(蚊も、瀬の音も、星の光りもみんなおんなしだ。……たゞわしは違ふ。お兼もすつかり變つて了つた。わし等だけは老いさらばへてこんなになつて了つたんぢや。)

然し又、昔さゝやきあつた老いぼれの後から又若い男女が出て来てさゝやきあつて、やがて彼等も自分達の様になるであらうと思ふと彼は悲しさうに頭を振つた。

松音寺の谷から吹き降して来る山風が對岸の木立をざわざわと一ゆすりして此方岸の芋畑に擴がつて唐も

ろこしの葉を大仰に鳴らした。それが止むと一しきり太鼓の音が途切れ乍らゆるやかに聞えた。

(うん。太鼓の音もおんなじぢや。……いや待てよ。あの時は勝つた祝の祭ぢやつたが、今年のは敗け太鼓なんぢや。)

萬吉は眼を瞑つて胡麻塩頭を傾けて耳を澄ました。

太鼓の音は想出の中の音色と少しの違ひもなしに單調にゆるく響いて聞えた。

(六)

鰻の群は黒くぬめぬめと川を遡つた。

深い海の底で透き通つた針の様な身體に生れついた彼女達は海から川口へ、川から溪へと旅を續けて來た。

透明な針の子供は、今肉附の良い美しい娘にかはつた。

若い男の鰻達は執念深く娘達のあとを追ひかけて來た。

逃げるだけ逃げて娘達は暗い岩の陰で胸をどきどきさせて眼をつぶつた。

嬉しい抱擁。白熱した若い生命の嚮宴。

軽い疲れを感じて一眠りすると、又見えないう不思議な力が彼女達を新鮮に上流へひつぱるのだつた。星の降る様な美しい晩、健康な空腹を締め、すのよい匂が誘惑して、彼女達は奇妙な竹のおりの中へ入つて了つた。

萬吉は眼をこすり乍ら、どうに手をかけた。

(?)

ずつしりとした重みが、彼の眠氣の最後の一オンス迄吹きとばした。

期待に震へる両手でおそろおそろ持ちあげると彼は法外な幸運を眼の前に支へたまゝ、ぽかりと口をあげた。

星明りに透かすと、丸々と太つた鰻が何十匹となく黒々とうごめいて居た。

(千両もんぢやー！)

水のしたゝるどうをしつかりと両手で抱へ込んで、彼は岩の上を宙をとぶ様にして家へ歸つた。

餘程、お兼やお春を起して自分の手柄を誇らうと思つたが、又明方迄かけておいで今度捕れるのと併せて威張つた方がいゝと思つたので彼は大人しく軒下に吊つてあつた魚籠をとつた。

どうのつぼまつた口をあけると、ぶりぶりとはちきれ様な腰をふつて鰻達は魚籠の中に躍りこんだ。

いそいと又、どうをかけおへて戻つて来た萬吉の寝息が大きく聞えはじめた頃、しつぽりと濡つた夜露の道をお春が歸つて来た。

うづく様に心地よい疲れが彼女をすつかり眠くして居た。

身體の蕊だけが、弾みのある若さで未だ火が點つて居て、四肢は海月の様にしびれて疲れ切つて居る感じだつた。

愛らしい二重瞼の睫毛も、くつききさうになつて、半ば夢現つて足を運んだ。

突然彼女は何かに躓きさうになつて一寸泳いだ。

丸くて弾力のあるものがころころと轉げて、中から何か黒々としたものが流れ出した様に思はれた。

然し其の偶發事も柔らかな意識の休息から、彼女を浮び上らせるには足りなかつた。

彼女は眠かつた。

暗闇の中で、紅白の布團を被ると、乳房の未だ熱い娘は獸の様に眠つた。

川原の小さな小屋の上で、星座は靜に其の位置をかへ、銀河は眼のさめる様に東北から西南へ流れて居

た。

鰻の輩は再び自由になつて、暗い溪流をのぼりはじ

頭 痛

四五日前に誘はれるまゝに飲んだ屋臺のユツプ酒が、今迄崇つてゐるわけでもなからうが、この二三日夕方になるときまつて頭が痛むのだつた。

電燈が灯る頃になつて、もうそろそろ痛くなる頃だ、と思つてゐると必ず痛みがしくしく來るのが不思議だつた。

うつたうしい梅雨前の天氣のせいにしてしまへばそれまでの話だが、庸三に見れば頭が痛いと言ふ事はどんな理由をつけた所で變りはしない。

今晩は昨夜少し遅くまで頼まれた原稿を書いたりしてゐたのが手傳つて、頭の芯がづきづきしてゐたが、九時頃になつても取れないので、一眠りして見れば、と考へて敷放しの布團にもぐり込んで見たが、どうにも眠れるわけのものではない。

めた。——一九四六・八一

米 田 清 一

それに空氣は梅雨のしめりを含んでどんよりと重たく、たゞでさへ暗鬱なこのアパートを一層じめじめしたものにしていゐた。

しばらく、電燈を點けたり消したりして寝返りをうつてゐたが、どうにも堪らなくなると、そそくさと下駄をつゝかけて町へ出て行く庸三であつた。

空は曇つて星も見えなかつたが町はまだ幾分明るかつた。

庸三は人通りのまばらな役所通りの電車道を、ちびた下駄をひきづりひきづり極くゆつくり歩いて行つた。

どこに行くあてがあるわけでもなかつたが、川岸へでも出れば幾らかは痛みもとれるだらうと考へて、そろそろその方角に歩みをうつして行つた。

川面は黒くしづまりかへつて、對岸の家々の灯がちらちら映つてゐる切りで他には動くものもなく、一樣にうるんだやうな夜景がひろがつてゐた。

時々右手の橋の上を、どろどろと響きを立てて通り過ぎる電車の影がばけもの様な形をして並木の向ふ側に見えた。

流れにさからつてしばらく行くと、その電車の通つてゐる大きな鐵橋にぶつかる。

橋の上に立つと、しめりけを含んだ川風が冷く顔に當つて幾分氣分をよくするので、庸三はしばらく一處につき立つてゐたが、向ふ岸の遊廓の灯が目に入ると、何と云ふことなしにその方へ歩き出した。

暗い狭い小路を抜けると、兩側は軒燈のかけのなまめかしい娼家の軒がつゞいてゐた。

嬌聲の中を、やゝ廣い小路を右へ曲ると、普通のしもたやの家がつゞき、そのあたりに雑誌の編輯でちよいちよい顔を合はす江原と云ふ二三歳年長の男が間借りしてゐる家があつた。

この江原と云ふ男は實に仕方のない奴で、小説を書くやうな事を云つてゐたが、ついで作品を見たこともないし、近頃は何か怪しげな女と同棲してゐるとか、喫茶店の女給と結婚したとか云ふ噂であつた。

固より庸三はあまり親しくもしてゐなかつたので、一二度訪れたことがあるきりだつたが、一階に灯がついてゐるのが目に入ると、一寸訪ねて見る氣になつた。

案内を乞ふと、二階から江原の聲で「上れ。」

と怒鳴るのが聞えた。

庸三が部屋に入つた時、彼の情人らしいものは見當らず、江原は一人で女物の派手な布團から首だけ出して本を眺めてゐた。

「一人かい。」

庸三はゆつくり坐りながら尋ねた。

「今、一寸、買物にでも行つたんだらう。」

聞きもしないことをまじめな顔で答へた。

この男がまじめな顔をする時、どう云ふ譯か、すぐにかからかひたくなるのが庸三の悪い癖の一つだが、今日はこめかみで鳴つてゐる血の音のせいである元氣もなかつた。

庸三は無遠慮にそこにある友禪の座布團に坐り直すと、ポケットから「きんしぐ」を取り出してゆつくり火を點け、ふうと天井に吹いた。煙草もあまり旨くなかつた。

「どうした。馬鹿に消耗してゐるな。」
江原はにやにやしながら云つた。

「ふむ」
はかばかしい返事もせず、庸三はじろじろ部屋の様子を見廻してゐた。

白粉の載つてゐる鏡臺や、壁にかゝつてゐる派手な着物等は、女の體臭をむつとする程發散させてゐた。

「消耗もするだらうさ。」
江原は一人で心得顔にうなづいてゐた。

どうせ光子の事をからかつてゐるのだらうとは見當がついたが、むきになつて怒ることも出来ないし、返事するのも面倒なのでまゆをしかめたきり庸三はふりむきもしなかつた。

光子の事を江原に話したのは庸三の大失策だつた。かうした信用出来ない男のことだから、どうせろくな事はあるまい、とは思つてゐたが、つい相手の如才なさに引込まれてしまつたのだ。

一週開程前の話だが、たしか雑誌の編輯會議が済んで、庸三がアパートへ歸るつもりで電車の交叉點あたりまで来たときだと思ふが、一緒に歩いて来た江原に誘はれてそのまゝ近くの喫茶店へつれ込まれた上、先輩ぶつた態度でいろいろと教訓された擧句に

「君には……その……何ぢやないか……すばらしい美人のグリープテがあるさうぢやないか。」

等と言葉巧みに話しかけられてとうとう一切合切を話させられてしまつたと云ふ譯だ。

光子は庸三の遠縁に當る家の娘で、他にこの土地に知人と云つて別れない庸三は、しばらくその家に厄介になつてゐたことがあるので、年も二つしか違はぬ光子とは自然いゝ話相手になつてゐた。

何分、庸三も若いのだし、又若いだけにロマンチックでもあるのだから、光子を密かに戀人に擬した所で不思議はないとしても、光子はまだ全然子供だつたし、さうでないにしろ、あまり無邪氣すぎる少女だつたから、さうした庸三の氣持が解る筈もなかつた。

それに、庸三の方も光子の前に出ると固くなり勝ちで、鹿爪らしく文學論や作家論を始めてしまふ始末で、むしろ自分の氣持をけどられるのを恐れてでもゐるかのやうだつた。

だから、今迄は何と云ふこともなく過ぎて来たわけであるが、庸三がこの春、今のアパートに移つてからと云ふもの、さうしげしげ行くことも憚られたし、又庸三自身もあくどい眞似をして光子の無邪氣な氣持を傷けるやうな事があつては、と餘計な氣を廻して足

も遠のいてゐた。

所が、これも庸三の云ふことだから彼一流の杞憂かも知れないが、近頃光子がはかばかしく話相手にならぬばかりか、どうやらつとめて會ふことを避けるやうにさへ思へる、と云ふのだ。

「どんな氣持だか知らないが……」

と庸三がひどく沈痛な面持で話してしまふと、江原はさも同情に堪えぬ、と云ふ風に、したり顔でうなづいて見せてゐた。

その後と云ふもの、江原に會ふ度にこの話を持出されて、實は少々困惑の態でゐたわけである。

「消耗するだらうよ。」

江原は庸三のケースから煙草をつまみ上げると、マツチを取つて火を點けた。硫黄の匂ひがつんと鼻に來た。

「まあ、思ひ切つてはつきり云ふんだな。他に手はないよ。」

煙草に火をうつし乍ら江原は頼みもせぬ事を無責任に喋つてゐた。

庸三はがながんする頭をもて餘して、江原の云ふことを聞き流してゐた。

或ひは、この光子の事件も庸三の頭痛の種だつたの

かもしれぬが、さうしたことを一々思ひ出されるのは面倒である上に、かへつて頭痛を強くするのにきまつてゐる話だから、たゞむやみに煙草を喫つて幾分でも痛みをごま化すより他なかつた。

「たゞいま。」

案外子供つばい聲で江原のをんなが歸つて來た。一寸見は女學生が和服を着たやうな小娘だが、仔細に觀察するとやつぱりどこか水商賣の女らしい所が見えた。

庸三は急に味氣ない氣持に襲はれて煙草をもみ消すと、紹介しようとする江原を尻目に、

「よろしく。」

と女に禮をするなり一氣に階段を駆け下りた。

「おい、一寸待て、お茶でも呑んでゆけ。」

そんな事を怒鳴つてゐる江原の聲が聞えた。

「どこへ行かう。」

雨もよひの空を見上げながら庸三はづきづきするこ

めかみを押へて獨り言た。

結局、もとの川岸へ出るやうな事になつた。

川に沿つてぶらぶら下つて行くと、右手にも左手にもこの町の特徴である丘陵が黒々とのびてゐた。

——誰も人の來ない所がい——

ぼんやり考へながら暗い場末町へ入ると、やがてあたりは田圃がひらけて來た。

水面も見えぬほど黒く密生してゐる稻田の畦に腰を下すと、しばらく頭を抱へてじつとしてゐた。

蛙の聲があたり一面にひろがつてゐた。

降るやうな蛙の聲の中で庸三の頭はかつかつと火照つて、思ひはとりとめもなく擴がつて行つた。

江原の事、光子の事、江原の情婦のこと、そしてそれに附屬する雑多な出來事の印象がごちやごちやと一遍に頭の中を駆けめぐつてゐた。

庸三は脱いだ下駄を枕にすると、畦草の上に長々と手足を伸した。

頭上には雨氣を含んだ夜の空が今にも垂れ下りさうにひろがつてゐた。

疑ひ深い庸三にとつては、江原が光子の事を聞き込んだ事と、光子が庸三によそよそしくなり始めたことの間に何か因果關係がありさうに思へてならなかつた。

そこまで氣を廻さなくてもよささうなものだが、と自分自身に苦笑して庸三は目をとじた。

どのみち、何時かは光子に打明けねばならなくなるだらうが、さうすれば、あんな子供みたいな娘のこと

だから一遍によそよそしくなるに違ひない。さりとて云はないで居ればますます頭痛がひどくなるだけの話である。

そんな所へ、江原のやうな男から下らぬことを吹聴されたりして、それが光子の耳にでも入つた日には、どうせ庸三にとつてよくない結果がやつて來るのはしれた話である。

庸三は頭の痛みの忘れかけて、しめつた草の上でしばらく宙をみつめてゐた。

誰か近づいて來る氣配がしたので庸三は半身を起した。

二つの黒い影がついたりはなれたりしながら近づいて來た。庸三は苦笑してそつと立上つた。若い田舎の男女がむつまじく語らひ乍ら傍を通りすぎた。

「ねえ……頂戴よう……ねえ。」

女の聲が通りすぎま庸三の耳に飛び込んで來た。

庸三は微笑をかみこころして反對側へ道をとつた。

ひんやりしたものが一滴顔に當ると、蛙の音は増々

はげしさを加へるやうになつた。

ぼつぼつたよりなげに雨が降り出して稲の葉が軽く

ゆれ始めた。

——六月の雨は何と云ふのかしら。つゆだらうか。

それとも陰曆五月のさみだれだらうか——
そんなことをぼんやり考へて、ゆつくりゆつくり遠
い灯をめざして歩いて行つた。

この季節の雨のことであるからさう烈しいものでは
なかつたが庸三は肌寒さにぞつと身ぶるひすると、む
やみに額にたれさがる髪を掻き上げた。

どこをほつつき歩いてゐたのか、夜も白みかゝる頃
庸三はぐしよ濡れの姿でアパートへ歸つて来て、ぬれ
た上衣を脱ぎすすると、しきはなしてある冷たい布團に
もぐり込んだ。

「人の子は枕する所なしか、どうやら俺の神経も少し
調子が狂つてゐるやうだ。」
呟いてひとりへらへら笑つてゐた。

「光子の事はどうにもなるまい。どうにもならないん
だ。」

どうにもならぬ、ならぬとくりかへしながら疲れが
出てそのまゝねむつて行つた。

目を覺すと晝近くであつた。遅い朝飯を掻き込む
と、寝不足に痛む頭をもてあまして結局また町へ出て
行く事になつた。

空は綺麗に晴れ上つて昨夜の雨の名残は町を流れる
おはぐろどぶの水量にだけあつた。

庸三は頭髮もぐしやくしやのまゝ狂人のやうな目附
をしてやけくそに歩いて行つた。

映畫館の前まで來ると、ふと入つて見る氣になつて
庸三は暗い觀客席へ足を運んだ。

フランス物で名畫の噂の高いものだつたが、録音の
悪さはかへつて庸三の頭痛を昇進させる結果になつ
た。

庸三はろくろく畫面も見ずに、急造の木製の椅子の具
合悪さに足を組みかへ組みかへして、いらいらと落着
かぬ態度であたりを見廻してゐた。

パツと電燈が場内を明るくすると、庸三の二三人前
に見覺えのある光子の明るい洋服姿が見えた。その隣
の背廣は光子の義兄でもあらうか、だがその光子の
義兄と親しげに話してゐる男は誰だか一寸見當がつか
ない。

「ふん、來てやがる。」

とつさの感じを亂暴に表現して、庸三はそれでもゆ
つくり煙草に火を點けると思ひ切り煙を吸ひ込んだ。
光子がふりかへつたやうにも思へたが、庸三は横を
向いたまゝ目も動かさずにひたすら煙草を吸つたり吐

いたりしてゐた。

次のニュースが終りかけると、庸三はいち早く席を
立つた。つゞいて出て來る人も澤山ゐたが、うまく人
波を潜つて外に出ると、夏型の雲がたそがれ色に染つ
てゐる空を眩しさうに見上げて、鋪道の埃の上を極く
悠くりと、歩いて行つた。

「庸三君ぢやないか。」

と云ふ、聞き覚えのある聲に思はず振向くと江原がに
やにや笑つて立つてゐた。

その傍に光子の小さな姿と、その義兄の長身とが立
つてゐるのを見ると、庸三は、何故江原が光子の事を
知つてゐたかが判るやうな氣がした。

「さうか、江原め、こゝから聞き込んだな。」

庸三は江原に返事を與へず、顔をしかめてわざとの
ろのろと光子の義兄の方へふりむいた。

「どうした。」

庸三の表情に驚いて一寸たじろいだやうであつた。

「みろ！」

庸三は残酷な快感を瞬間感じた。

「頭が痛むんで……。」

つとめて光子の顔を見ないやうにして、ぼつたり答
へた。

「さう、大切にしまへ。」

きまづい面で光子の義兄は光子を振返へると歩き出
した。

「さよなら。」

一寸立止つてためらふやうに庸三の顔を見上げる
と、光子はあどけなく囁いた。

「さよなら……。」

庸三はそつげなく云ふと、くるりと反對の方向へ歩
き出した。

いきなり肩を叩かれて庸三はぎくりとした。

「何を怒つてゐるんだ。」

江原が薄笑ひを浮べてゐた。

「ついて來たのか、あつかましい奴め——」

かるくまゆをしかめると

「別に怒つてやしない。」

氣のりせぬ口調に注意しながら、庸三は答へた。

「さうか、谷君（光子の義兄）から話はよく聞いてゐ
たが、會つたのは今日が初めてだ。なかなか可愛らし
いお嬢さんぢやないか。どうしてあんな妙な顔をして
ゐたんだ。だめぢやないか。」

江原は庸三の表情には無頓着に相變らずの氣嫌でし
やべつてゐた。

「うん。」

庸三は別のことを考へてゐた。

——光子は……なぜあんなにそつけないだらう。そして、この江原と云ふ男は、俺にとつて一體何者なんだ——

庸三の口許には奇妙なうす笑ひが浮んでゐた。

「一體、どうしたと云ふんだ。昨日から少し變だぜ。」

江原はげんさんさうに庸三のしかめた眉の間を覗き込んだ。

兇暴な氣持を押へつけようと、庸三は頬をびくびくとふるへさせて努力してゐた。

するどい憤情が出處を見つけて庸三の頭の中を駆け廻つてゐるのに違ひない。

實際、誰と云つて怨む筋合のあるものではなかつた。

光子を怨むことなどは到底出来なかつた。光子の義兄だつて怨まれたら驚くだらう。そして、この江原を、この庸三の目の前で間の抜けたうす笑ひを浮べてゐる男を怨む理由もありはしなかつた。

庸三の理性は、しんしんとしめつけられるやうな頭痛の中に、次第に混亂して行つた。

一そ一思ひにこの男に思ひ切り感情的にふるまふこ

とによつて自分の説明不能の心理状態を解決してやらう、と云ふ途方もない考へをこの混沌の中から拾ひ上げると、庸三はしづかに顔を上げて低く呼びかけた。

「江原。」

「なんだい、びつくりするぢやないか。そんなににらむなよ。」

江原はうす笑ひを浮べたまゝ答へた。庸三は高ぶつた感情が、この焦點の合はぬ答への中にへたと崩れるのを感じた。

——江原の奴は俺の急所を握つてゐやがる——
危く理性の限界内に立直つた庸三は、想ひ出して愕然とした。

江原が庸三のこのさゝやかな感情を知つてゐる數人の中の一人であり、光子に近づきがある以上、この男に對する庸三の態度は光子にきつと影響を考へるものに違ひない。

——うつかりしたことを喋つて子供のやうに潔癖な光子の感情に自分自身を汚點として残すやうなことはすまい——

庸三はぎきぎきする頭をやつと纏めて口をつぐんだ。二人は敵同士のやうに黙りこくつて夕ぐれ近い路上につゝ立つてゐた。

「立つてゐても仕方ないぢやないか。」

江原は庸三を促すやうに歩き出した。

「……………」

庸三は無言で従つた。

日は暮れかけて街は雜踏して來た。その人ごみの中にあつて、庸三は再び亂れようとする頭を一心に理性の範圍にまとめようと努力しながら江原の後を歩いて行つた。

「あなた。」

甲高い女の聲が突然庸三をびつくりさせた。

江原の情人の子供つばいやせた體が、安つばい構への喫茶店の入口に見えた。

「おう。」

江原は手を振つて招いた。

女は夕方の逆光線の中に佇んだ。

「どこへいらつしやつてゐたの。」

女は二三歩近づいた。

「映畫に行つて來たんだ。おい君知つてゐるだらう……」

「その……………」

江原は庸三をふりかへつて紹介しようとしたが、女は江原の肩に手をかけると甘つたれた聲で囁やいた。「貴方いらつやらなくて淋しくて仕様がなかつたわ。」

庸三は二人の姿をうつろに見つめてゐた。

そして不意に、理由のない怒りがぐつとこみ上げて來るのを感じた。

光子でもない、谷でもない、江原でもない、理性に否定された新の他に敵な外物を發見した暴力はこの女を敵と誤認したのであらうか。

庸三は夢遊病者のやうにふらふらと女に近づいて、じつとその美しいけれど無智な顔をみつめた。

女はおびえたやうに目をそらした。

その瞬間、庸三はもう女の横つらに思ひ切り平手打を食はせてゐた。

獸のやうな呻きが庸三の齒の間からもれた。

「何をするんだ！」

江原はとつさに庸三をつきとばした。

へたへたと道ばたに倒れた庸三の目には、少女の赤くなつた頬と、江原の興奮した顔とが二重うつしになつて見えた。

庸三は日中のほてりの残つてゐるアスファルトの上につきぎきと鳴る頭をおしつけて烈しく呼吸してゐた。

泣いてはゐなかつた。が、その目は動物のやうにぎらぎらと光つてゐた。——一九四六・六一——

ゼノーンの運動否定論に就いて

福 村 勗

ゼノーンの運動否定論を批判するに際し先づその時代の學界に於けるゼノーンの位置や、その時代の數學、哲學の概要を知ることにはこの論を理解するのに大いに役立つと思はれる。

紀元前五世紀にゼノーンが現れたのであるが、その一世紀前即ちB.C.六世紀においては、ピタゴラスが學界宗教會において、非常に大きな地位を占めて居た。ピタゴラスは周知の如く、偉大な數學者でもあり、又哲學者でもあつた。ピタゴラスは算術をギリシヤの商業上の實利實益方面から救つた人であるが、ピタゴラス自身の思想は數學に基いて居たのである。この時代に於ては未だ地動説が考へられず、悠遠なる天體は神秘的なものに考へられ、特に天空に懸る星に至つては一層神秘化されて居た。そしてその星座が如何なる形をして、星の數は如何程のものであるかは常に當代の人々の念頭にあつた事であらう。

ピタゴラスは數は星座の如き點の集りでありそして實在するものはすべて數を有すると考へた。彼の「萬物は數なり」と言ふ考へは「萬物は點の集りである」と言ふことになる。この事はその根柢において「點は大いさを持つ」と言ふ事を示してゐる。點は大いさを有しない事は、我々が幼き時から學んで來たユークリッド幾何學の根本であるが、これは零が発見される迄に幾世紀も要したと同じ様に、長い間の洗練を経て後生じた事である。

點が大いさをもつといふことは必然的に有限箇の點から線分が成り立つて居るといふことになる。それ故その

二つを取ればその比は常に簡単な數で示される。斯くしてピタゴラスは音樂で知つた比例の理論と共に、數と圖形の美しい調和が宇宙の調和を示すものとして一つの宗教的團體さへ作つて居たのである。然るにピタゴラスの定理が発見されるに及んでこゝに一大障害が発生したのである。勿論この定理は最初の中はその様な障害ではなかつた。「直角を挟む二邊の平方の和は斜邊の平方に等しい」と云ふ美しい調和はピタゴラスをいやが上にも力づけたのである。この定理の發見に依り喜びのあまり牡牛を神に捧げたと云ふ逸話が此の事實を傳へてゐる。然し三邊 a, b, c とする時この a, b, c を求めることが問題である。遠くエジプトに於いて既に3, 4, 5を三邊とする三角形は直角三角形である事が知られてゐた。しかしこの a, b, c が自然數であるのは特定の場合のみである。直角を挟む二邊 a, b が相等しい時即ち直角二等邊三角形なる時、斜邊 c はどの様に表はされるだらうか。二邊の斜邊の比はこの場合自然數の比では表はされない。今日吾々が用ひる數で示せば $\sqrt{2}$ なる無理數の比で示される。斯如き數の存在はピタゴラスの理論の根據にとつては許すべからざるものであつた。而も眞理は人間の發見によつて生ずるものでなく、常にそれ以前に存在して居るのである。この通約不可能なる線分によつて、彼の理論の根據は揺り動かされ、これから後暫くはピタゴラス及びピタゴラス學徒の惡戰苦闘の歴史であつた。然るにB.C.五世紀エレア學徒のゼノーンが出現するに及んで、ピタゴラスの萬物は數で表はせると云ふ夢は無慘にも打ち碎かれてしまつた。ゼノーンは多や運動は背理であることを明らかにしようとした。その師パルメニデスの考へは「有」といふ觀念に基いて居る。物あるは即ち有にして非有は考へられない。有は、唯一無二、不可割、不變不動、であるといふのがその論旨である。ゼノーンは多や運動は否定した故、正面から師を辯護したのではなく、裏面から師の説を擁護して居たと思はれる。

ゼノーンの運動否定論は普通次の四つから成ると思はれてゐる。

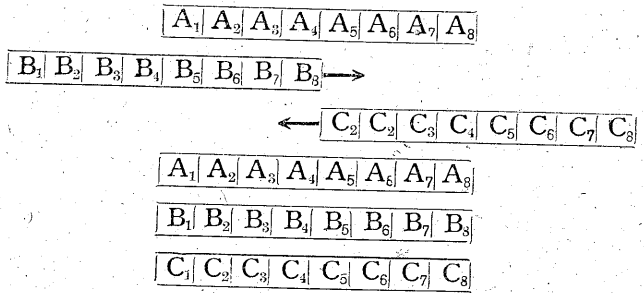
- (一) 運動體はその終點Bに到達する前に全道程ABの中點Cを通らねばならぬ。Cに到達する前にACの中點Dを通らねばならぬ。以下斯くして運動體は限りなく多くの點を通らねばならぬ。
故に運動はあり得ぬ。

(二) アキレスが龜を追ひ驅けるものとする。アキレスが最初龜の出發した點に來た時には龜は既に幾何か前
進して居る。又アキレスが此の地點に到達した時には龜は尙少し前方に進んで居る。以下追而斯如くである
から、アキレスは何時になつても龜に追ひ附くことは不可能である。

(三) 飛んで居る矢は静止して居る。何故なら矢が一定の位置を占めて居る時
には静止して居なければならぬ。然るに飛んで居る矢は各瞬間々々の時刻に
於いて、一定の位置を占めて居る。故に矢は運動することが出来ない。

(四) 上圖の如く平行に三つの物體がある。
Aの列は静止して居るものとし、B及びCは反對の方向に相等しい速さで運
動し始めるとする。然る時は或る時刻には上圖の下圖の如き位置に來るに相違
ない。然る時BはA₅A₇A₈とAの列を通つて居る。然るにB₆は又、C₁C₂C₃C₄
C₆C₇C₈とCの八つの箇所を通つて居るに相違ない。従つてB₆がCを通過するに
要する時間はAを通過する時間の二倍である筈である。故に一定の時間はその
半分の時間と等しくなければならぬ。(零の發見)

右のゼノンの説は要するに空間時間の無限に小分せられる事を攻撃したもの
である。
彼の説は空間時間の不可分を示し、若し運動が許されるならその運動自身矛盾
であると云ふのである。例へば、



空間は形成され得ないといふのであらう。

又飛矢の問題でも、その運動を許すとすれば空間及時間は限りなく小さく分たれねばならぬ。一瞬毎に空間の
一點を通過するのだとしても、之を以つて一定の時間に矢が飛ぶといふ證明にならない。結局限りなく小さい時
間や空間が集つて如何にして有限なる時間空間になるのかといふ問題にもなる。斯くして見ると空間時間の無限
に小分せられるを否定し運動を否定したことは明かにピタゴラス學派の説を攻撃したことになる。以下逐條此の
説を検討して見よう。

第一の問題有限なる直線即ち線分がある時、その中點は $\frac{1}{2}$ $\frac{1}{4}$ $\frac{1}{8}$... $\frac{1}{2n}$... と如何ほどでも多くの
點を求めることが出来る。即ち是に於いても線分が有限箇の點から成るといふピタゴラス學派の考へは否定され
る。無限に多くの點を含むから、AからBに到達するには無限に多くの時間を必要とし、永久にAよりBには到
達することが出来ないといふのが前述の如く、ゼノンの云はんとする處であらう。これに對し斯の如き點を無
限に多くとる時、個々の點の距離は如何程でも小となり、それに時間も長さのない瞬間の集合とするなら、これ
を通過する時間も無限に小となり、AからBに到達するには必ずしも無限に多くの時間を必要としないと考へる
ことも出来る。斯の様にピタゴラス一派の考へ方を拋棄することにより(一)は一應曲りなりにも解決出來た様に
思はれる。しかし果してかゝる點や瞬間の集合を以て連続的な流れや空間が構成されるものであらうか。この問
題の解決は保留して更に次の問題を(二)の考へ方を以て考へて見よう。

第二の問題 (二)のアキレスと龜の問題ではアキレスと龜とが時間を媒介として組立てられて居る。出發點に
於いて既にアキレスと龜との間には距りがある。この出發點の差に於いてアキレスは無限に多くの點を通らねば
ならぬ。故にアキレスは永久に龜に追ひ付けないと云ふのがゼノンの論の適當なる解釋であらう。アキレスの
位置に對するものは龜の位置である。従つて時間を媒介とする二つの點の運動と云ふことになる。(一)に於いて
は位置もそれに對する時間も共に大いさのないものと考へて解釋した。然しこの考へでは(二)はさう簡單には解
釋出來ない。純數學的に考へて次の様に解決して見る。今假に出發點で1の差を以て出發したとする。若しアキ
レスが龜の十倍の早さで龜を追つたとするとアキレスが1の距離を走つた時には龜はなるほどその前方 $\frac{1}{10}$ の

所に、次にアキレスが更に走つて $1\frac{1}{10}$ の距離に達した時は龜はその前方 $1\frac{1}{100}$ の所に來てゐることになる、故にアキレスの進んだ距離を次に加へ合すと次の如き公比 $1\frac{1}{10}$ の等比級數になる。

$$1 + \frac{1}{10} + \frac{1}{100} + \dots$$

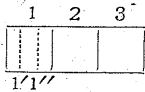
これは收斂級數であるから和を有する。

$$\text{和} = 1 \times \frac{1}{1 - \frac{1}{10}} = 1 \times \frac{1}{\frac{9}{10}} = \frac{10}{9}$$

故にアキレスが 1 の距離を走るのに一時間かゝるとすれば、 $10\frac{1}{9}$ 時間後にはアキレスは確實に龜に追ひつくことになる。然らば果してこれでいゝだらうか。全く狐につままれ、虎を描いて猫になつたといふ様な感がある。これは單に數學として此の計算に誤りが無いことを示してゐるに過ぎない。この問題の本質には依然觸れて居ない。是で再びこの解決を保留して(三)の問題に移つて見よう。

(三)の問題 (三)の飛矢の問題に於いて、時間が點の如き集りと解して見るに各時刻に於いて矢は一定の位置を示して居るから矢は静止して居なければならぬ。然し現實の問題として矢は立派に飛んでゐる。して見ると(一)(二)の考へ方では愈々動きがとれなくなつて來た。等一瞬間瞬間の時間を求めて連續的な時間の流れを形成出来るものだらうか。個々の點の集りをして飛びつゝある矢の連續的な流れが理解できるものだらうか。月並の移處といふ考へで運動が定義されてよいものだらうか。矢が静止して居ることを示すには、一定の時間に於いて矢が一定の位置を示して居ることを示さねばならぬのではないだらうか。

更に(三)の飛矢に關して次の様な説もある。有限の時間は無限には分割出來ない。順次分割して行くと分割不能の部分に相當する部分が珠數玉の様になつて居る。今矢の長さが一定の小さいものとする。この長さを即ち矢が 1 を運動する即ち通過すると云へば、矢の尖端が前ぎに通る $1'$ と後に通る $1''$ とを有する。矢が 1 を通る瞬間が $1'$ を通る瞬間と $1''$ を通る瞬間とに分かたれる。之は 1 を通る瞬間が分割されないといふ前提に反する。故に



矢は 1 に於いて不動、 2 に於いてでも不動……以下同様であるから矢は動かぬ。この様な考へ方は次の(四)に於いて尙はつきり示される。ゼノン(一)(二)に於いて空間時間が無限に分割されるとすると運動は不可能なることを示し、(三)(四)に於いては、空間時間が無限に分割されない。若し分割されるとすると矛盾になるから運動は不可能なることを論じて運動否定論を尙一層完全にしようとしたとも考へられる。

(四)の問題 今ABCの三列がすべて點より成り立つて居ると考へると尙はつきりする。B₀が新しい位置に移るものはこれ以上分割出來ない一瞬の中に終ると考へるとB₀がA₀からA₁に移る瞬間にB₀がC₁に移ると考へられ、一瞬が更に他の一瞬間を含み、矛盾となるといふのが本質であらうと先きに述べた。

斯して分割できない筈のものが更に分割されねばならぬこととなり、線分も時間も共に先の如き大きいものとして考へて來た方法が全く無力となつて來た。(一)に於ける解法は一見適當なものに見えながら何等の力のないものになつて來たことが分る。然らば如何にしてこの逆理を解決するのだらうか。而も現實の問題としてはゼノンの論と全く正反對となつて居るではないか。斯して見ると單なる瞬間を集めたものが果して時間の流れとなり得るだらうかといつた連續問題、そしてその根柢をなす數體系そのものをもう一度根柢から考へて見なければならぬことになつた。この數學の基礎を理解してのみ連續や運動が理解されるので、この逆理を否定するにしろ、肯定するにしろこの問題の研究がゼノンの問題の解決の唯一の方法になつて來た様に思はれる。

二、運動の成立

是に數の體系を理解するには數そのものを知らねばならぬことが問題となつて來た。數理の根柢には數そのものの認識が横はつて居るからである。

ピタゴラス以前の數學(それは算術が主であつたが)は實利方面に利用されて居た。しかしそれ以後今日に於いては數學は本來數の學問であり、實際方面は應用數學と呼ばれて居る。

今日を標準とすれば未だ文明の發達せざる初期に於いては數は量と一致して居た。即ち數學は量の學であつた。今日に於いても數は量とは非常に密接な關係をもつて居るが、數學の對象はあくまで數そのものであること

が認められて居る。群論集合論は本來所謂高等數學の中でも初歩のものではないから、それが如何なるものか殆んど知らないが、然し是等が全數學の基礎と見られ、群論の研究の完全なる發展のためには數そのもの、純粹なる認識を必要とし、又集合論に於いても超限數の計算に基いて居ることが知られて居る。我々は數學の本質が數理にありと考へるのであるが、然らば數理とは如何なるものであらうか。數理とは數そのもの、認識、數そのもの、理論ではないだらうか。之を理解してのみ數學に對する理念を得、ゼノンの逆理も何等かの形に解明できると思はれる。

然らば數學の基礎として數そのものは如何にして認められるだらうか。我々の認識は大別して先驗的なものと經驗的なものと二つに別たれる。數は先づ經驗により認識され、然る後その抽象に依つて思惟せられると云ふ經驗論もある。然し乍ら數學の取り扱ふ任意の數をすべて經驗によつて實證することは本來不可能なることではないだらうか。經驗によるものは基礎的な數のみでこの關係から他の經驗し得ざる數の關係に類推せられると經驗論者は云ふかもしれない。が然し之は經驗せられたるもの、類推せられたるもの、この兩者に何等かの關係が存することを無意識的に示して居るのではないだらうか。

田邊博士は之に關し次の様に示された。

「哲學者ミルは $2+1=3$ は二個の石塊と一個の石塊との集合に依つて知られ、3の定義をもつて石塊の經驗に依ると看做すが、この場合1, 2, 3は經驗から概括せられる類概念ではない、石塊の3も林檎のも凡て同一の3であつて、石塊の3と林檎の3は相異なる3で兩者から3なる數概念が抽象せられると云ふ如きではない。種々の事物に同一の3が適用されるのであつて3そのものはかゝる適用を離れて思惟本來の作用により成立する。經驗の特色は種別的なることに存するから、如何なる對象にも妥當であるといふことは思惟の本性に根據がなければならぬ。又數が如何なる事物にも妥當することを主張する點に、數が經驗と獨立に思惟の本性により、數が經驗と獨立に先驗的に成立するものなることを暗に含意して居る」と(數理哲學研究)

經驗は思惟以前のものでなく、經驗の本質は思惟によつて構成されるものである。

斯く考へて來ると經驗的な思惟は限定的なもので、先驗的な思惟がより普遍的なことが判る。私自身數すべて

が經驗によるといふことを否定するにけぢぢではない。數理の命題は經驗的判斷でなくして先驗的判斷でなければならぬ。數理認識で先づ第一に擧げねばならぬ人はカントであらう。

カントは數學の認識がアプリアリであるのみならず、同時に綜合的な判斷に依る事を示した。かゝる綜合的先驗的命題を以つて或る純粹數學の可能根據を明らかにするのがカントの批判哲學の問題であつて、カントは時空の純粹直觀が數學の基礎なることを示した。

一個の物事を判斷するには分析的と綜合的判斷が叫ばれる。判斷の本質はこの兩者の融合に在りと云ひ度い。思惟の本性が常に分析と綜合の両面から成ることを認めるならば判斷は常に同時に分析的であり綜合的でないばならぬ。こゝで愈々この先驗的方法を以て數理の基礎概念を明らかにして見よう。

今日の數理の最も基本的なものとして自然數が認められて居る。自然數はもつとも基礎的なものとして最初に求められたものであるのみならず、數の體系中に於いて全ての他の階級の數は之より定義される。數の高次的發展として自然數から整數有理數無理數をして實數の體形に至り、此の實數に於いて、始めて連續等の概念が生ずることは後刻に述べる處である。古來から自然數に關する見解には種々あるが、大體之に眼を通して深く考察し度い。

先づ一定の公理を認めるなら幾多のものがそれから定義されると云ふ公理説がある。

成程吾々は公理説に従つて數學を學んで來た様な感じさへ感ずる。公理そのものに對して何等の批判をも加へなかつたのだから。

公理なるものを承認して之を以つて他の命題を嚴密に組織するのは數學としては美しい論理的體形を形成するかもしれない。然し公理自體を何等批判せず盲目的に承認するのは、餘りにも輕薄なこと、云はねばならぬ。我々が斯る基本的なものを盲目的に信ずることは我々の全生命を否定することである。公理説はその出發點に於いて缺點があるのではなからうか。公理自身矛盾なきことを示すには公理から導かれるすべての命題がすべて矛盾なきことを示さねばならぬ。有限のものから無限に多くのものを示すには、吾人は普通數學的歸納法を用ひ

る。然らばこの數學的歸納法は如何にして保證されたか。この方法が公理によつて證明されるなら、それは明らかに循環論である。我々は公理をして單なる規約とはせず、何等かの形に根據づけねばならぬ。即ちその公理の可能的根據を哲學的に明らかにせねばならぬ。數學に於てこの是非とも假定せねばならぬ公理即ち基礎概念はそれ自身論理的に説明出来ないものであるからこそ公理説に於いては、之を公理から導かれる命題の矛盾なきをもつて理論づけようとして居る。次に自然數をもつて物を數へ、物に順序を附するための記號なりとする記號説を考へて見よう。我々が求めて居ることは數が如何に用ひられるかといふ事ではなくしてその表す所のものは何かといふ事である。自然數をして、一定の順序に排列し算へる爲に作られた名稱と云ふのでは、今迄何をやつて来たか分からなくなる様な氣さへする。我々は記號そのものが表す所のものを考へなくては、演算の加減乗除の四則でさへも理解できなくなる様に思はれる。算へる作用そのものは決して記號を配合することではない。又繼起する意識現象に配するには記號を記憶に保存せねばならない。かゝることは當然不可能なることである。

次に自然數を單なる記號と考へないで思惟的なもの表れと考へ、所謂順序數となす序列説と考へて見よう。先の記號説に於いても數を記號となし一定の順序に排列せられる順序數と看做した。然し序列説においては之を單なる記號とせず、論理的に思惟せられたものとなして居る。この説の代表者としてデデキンドが擧げられる、デデキンドは物を物によつて映寫せしめるといふ映寫の概念によつて自然數を順序數と看做した。然し自然數が一定の順序でもつて排列せられて居るといふだけで、それが順序數であると結論出来るものだらうか。物を算へる爲にはそれ以前に數へられる數そのものがなければならぬのではないだらうか。數理哲學研究に田邊博士は次の様に述べてゐる。「一つの體系の映寫を ϕ とすると n といふ數は ϕ の綜合によつて生ずるもので、最後の ϕ が幾回目かといふことは n そのものの意味ではない。 n 番目といふ概念は ϕ の綜合に依つて生じた n を俟つてはじめて知られるのである。それ故自然數は順序數であるといふことは、不當の論斷と云はねばならぬ。」と。

そして基數こそ自然數の根本であつて、基數によつて生ずる自然數が經驗的對象に適用せられて順序數となるのだと結論して居られる。然し果してこれでいゝものだらうか。これに對する考へは後に譲つて、最後に自然數論の代表説の一として部類説を考へて見よう。

「部類とは概念の外延である。ラッセルは或る概念を以つて呼び得べき個體の總體を部類と名づけた、吾人は個々のものが或る部類に屬するや否やを決定することが出来る。扱つかゝる部類の相異なるものがある時、それに屬する個々の要素を何等かの方法にて互に對應せしめ、一方の部類の相異なる要素には必ず他の部類の相異なる要素が對應し、一對一の對應をなす時、之を相似の部類と呼ぶ。斯る相似の部類が屬する所の部類が數である。數は相似の部類に他ならぬ。」と。この意味は相似の部類が全てそれに屬する如き部類の數であつて、使徒の數が十二であると云ふ事は、使徒が他の同數の部類の凡てと共に十二と云ふ部類に屬し、 x は十二なりといふ命題を満足して使徒は十二なりと云ふ事が出来る」と説かれてある。然し斯る部類といふ概念に依つて、個々の數は定義出來たとしても、數相互の關係は如何なるものだらうか。自然數が一定の順序を有することは否定出来ない。斯して見ると基數と順序數は缺くべからざる自然數の要素となつて來るのではなからうか。部類説は次の様に數の順序を決定して居る。

x が零ならぬ u なる部類に屬する要素であつて、 x ならぬ u の要素の數が n なる時、 u は $\rho + 1$ なる要素を有する。 n に次ぐ要素は $\rho + 1$ である。斯くして零がそれに屬し、 n がそれに屬するなら、 $\rho + 1$ も亦屬する。如き一つの部類が有限數である。斯して部類をもつて定義せられた所の數が一定の順序に排列せられた部類を形造ることとなり、これが自然數列である。と。

以上大體自然數論と概括的乍らも見て來た。事實ポアンカレの示す如く、數そのものは論理よりも直觀の上に立つものであつて、これに基く思惟が數理を成立せしめ、又經驗的事實をも容觀化するものである。數は概念である。數は記號でなくして表す所の意味がある、一中隊の兵士の數を百名とすれば、五百名の兵士といふも五中隊の兵士と云ふも同じ事である。集合は吾人の思惟の對象とせられる要素の集りを示すものである。相異なる要素がそれ自身一對一の關係に映寫せしめられる時、等しい濃度の集合と呼んでいゝ。この類を表す所の概念が數なのである。數 1 は唯一の要素の集合である。此の 1 を含み更に x を含むなら $x + 1$ を含む如き集合が所謂自然數の系列を作るのであらう。確かに自然數は基數なる考へ方を必要條件とするがそれのみでは全くとは云へない。田邊博士は基數を以て自然數の根本と看做し順序數を以て二次的なものと看做された。基數を先に考へること

は、幾等でも大きい数のあることが不可能となる。又順序数を先に考へるも數へる爲には數そのものがそれ以前に存在しなければならぬ事になる。基数は空間的なものであり、量的性質を有する。順序数は數へられるものであるから時間的なものである。+1を次々に施しても序数は成立しない。成立する爲には前者が後者即ち空間的なものが時間的なものとなり、同時に又時間的なものが空間的なものにならないければならぬ。實にこの基数と序数は矛盾的自己同一となすのであつて、これが同時に自己否定をなす所に、新しい融合の境が開けるので、これは以後の論で尙一層判然として來ると思ふ。

愈々是で數の基本要素としての1の本質と、又その集合に於いて添加される1は先の1と如何なる關係に立つか。1+1=2は如何にして正當づけられるかと云ふことを考へる段階に達した。數1は決して+1と無關係なものではなく、+1との聯關を明にしてこそ、前者の本質も明らかになるのである。又1は零より導かれるものではなく、零は却つて自然數より定義されるものである。自然數の基本は飽く迄1である。數1は數へると云ふ作用により2に進み得る。+1は或る集合に今迄含まれなかつた要素を加へることによりて生ずる變化である。基本要素に對應する唯一の對象xよりなる集合に之と區別せられる他の要素を添加して、之に應じて+1+1=2が生ずると考へられる。斯して見れば1と+1とは互に相等しく交換出来るものでなければならぬ。然らば相等しいとはどんなことか。それは共通の關係を有することである。物と物が相對立して居る以上、數が集合として單に物そのものを示すのであつてはならぬ。只内面的に見た概念としてのみ理解することが出来る。思惟せられたるものとして共通の關係を有するに至る。數1は集合の要素を思惟し、その要素を思惟せられるものと思惟することに依り妥當性を有する。それ故何れを1とし他を+1とするも自由である。だから要素の結合と云ふ點で兩者は互に對立し、相對立する對象として一つの複合的對象に綜合せられる。それ故兩者は飽く迄否定的に對立し、自己を否定することに於いて一つの融合點を見出し、新たな獨立性を得て更に發展するものである。今一つの對象Aを考へて見よう。Aを對象として考へることは當然Aを非Aから區別すること豫想して居る。Aを非Aから區別することは同時に又非AからAを區別することになる。具體的にはA、非Aの全體を考へることが

Aを思惟する根幹として横はつて居る。更にこれはA、非Aを新しき一つの對象Bとしてこれを非Bから區別することを豫想してゐる。斯の様に論理的思惟の反省に於いてABC…の新しい項の系列が構成される。Bから見ればBはAが思惟せられた爲に豫想せられる所の主觀を客觀化したものである。AからBに進む事はそれ自身原基に還る事である。斯してABC…と内面的に發展する。そして如何なる發展の段階も猶發展する契機を含み、こゝに思惟によつて無限の體系が生れる。この様に、對象は直觀的創造的發展の中にある。勿論直觀に於いては當爲と存在とが未だ明瞭に分れざる未分化の状態にある。この内面的當爲に依つて存在を定めるのが思惟の本質である。これは原體験を分化發展せしめ、一層大なる統一を求めることである。思惟は無論創造的發展をなさしめるのであるが、是で先の様の一つの對象を決定することを考へれば、矛盾的自己同一的な意味を有することにもなる。この方面から見たものとして、思惟を統一することが數自身の反省であり、之に依つて對象は思惟せられたものとなる。是に於いて1や+1の意味が判然として來ると思ふ。是に數の1の考へられる所以が存し、これに非Aに相當する+1が綜合せられてBに對應する2が生れて來る。斯くして+1が綜合せられて新しき要素となる。nなる數は斯くして考へられたものである。是に自然數の生成が明かになつたがその基本演算たる加減乗除の意義は、この生成の過程から考へて明かである。

先ず加法に於いては自然數 $a+b$ はaを起點として、+1から+nに達すると同じだけの+1を施す事である。加法は自然數列の範圍では常に成り立つ。次に減法を考へて見よう。減法は自然數の範圍で成り立つ事もあつたが然らざる場合もある。是に零員數が決定される、即ちaがbより大なる場合には、bに加へてaとなる數cがあることは自然數の生成より明か、だ即ち

$$a-b=c$$

今もしaがbに等しいなら、bに何物をも加へないでbのみでaを考へることが出来る。之を次の如く示し、零を定義する。

$$a-b=a-a=0$$

今若しaがbより小さいとすると、bに零又は如何なる自然數を加へてもaにならぬことは明かだ。是で新た

に b に加へて a となる $1 \cdot c$ を導入し

$$a - b = 1 \cdot c$$

と定義し、この $1 \cdot c$ を以て負數とす。自然數の任意の數に對して負數が考へられることは論を俟たない。我々は是に、自然數・零・負數と整數系を生じたことを認める。

次に乘法に至つては論ずる要はないが、除法では整數の範圍では必ずしも成立しない場合が生ずる。 a が b の倍數なる時 a を b で割れば整數が得られるが、然らざる場合 a/b なるものを承認しなくては除法が完全とならない。是に我々は新しい概念を導入し被除數が除數の倍數でない時、 a/b を分數と呼んで居る。是に新段階が開ける。即ち整數・分數併せて之を有理數と呼ぶ。自然數からは是に有理數の段階に達したわけである。自然數の生成には論理的對象と定立する直觀の統一があつた。 $+$ の統一は自然數を構成した。然らば $+$ は任意の n 個の系列によつて統一される可能性がないだらうか。 $+$ が n 回統一せられて $+$ になると考へる時 1 は $1 \cdot n$ であり、そしてこれが新しき要素分數なのである。そしてこの分數・自然數・零・負數の綜合が有理數であるから、即ち自然數に於ける直觀の統一が有理數に發展したのだから、有理數に於ける大小相等或ひは四則の如き關係は自然數のそれと同じ様なものではなからうか。有理數の構成要素は自然數の 1 より $1 \cdot n$ になつたことは先に述べた通りである。 1 は固定したものであつたが、有理數に於ける $1 \cdot n$ は任意的なもので固定して居ない。故に有理數に於いては始めがなくなり又如何なる二つの要素の間にも猶他を含むことになり、その集合に於いては分布の稠密なる體形を形造る。扱て有理數に於いては加減法は論ずる必要なく自然數の場合と同様に認められる。我々によつて保證せられる。然しその逆即ち或る有理數の n 乗冪として生じた有理數を開く場合にはさう簡單には行ひて求めんとすれば無限小數となる。勿論無限なき小數と云つても有理數では循環小數である。開方の場合ではそれは循環せざる無限小數となり、有理數では到底表せない。是に新しき概念の導入が必要となる。吾々は今日のこの數を無理數と呼ぶ。この數は紀元前既にピタゴラスに依り發見され、而も解決されなかつたものである。有

理數に於いては如何に小さな $1/n$ なる單位に依つて構成された二つの有理數の間にも猶他の數の構成さるべきことが示された。即ち直觀の統一は有理數に於いては客觀化されることなしに残されて居た。然し思惟はこゝで止まるべき性質のものではない。更に高度の發展を要求する。この要求を充すものこそ實に無理數であるが、此の事は段々判つて來ると思はれる。無理數に關しては古來多くの學者に依り定義されてゐる。所謂デデキンドの切斷の考へ方は切斷そのものは既に有理數ならぬ體系を豫想してゐるのではないだらうか。又所謂カントルの無限小數の考へに於いては極限として無理數を定義することはその極限の存在を豫想せねばならぬ。然るにこれは定義せんとする無理數を俟つて始めて可能となるのではないだらうか。有理數の體系に於いては確かに直觀の統一が残されて居た。そしてこの直觀の統一を客觀化したのが無理數であると先に述べたが無理數を定義するには幾多の困難が横はつてゐる。然し此の有理數と無理數の綜合に於いては數は連續的體形を構成する事はその生成の過程により大體明瞭である。有理數と無理數の綜合を吾人は實數と呼ぶが、この實數の體形に於いてその構成の無限が考へられる。有理數に於いてはその極限に於いて循環する無限の小數なるものが考へられた。然し數學に於ける數としては循環せざる無限小數が實に多し。この循環せざる無限の極限に於いて思惟の絶えざる發展統一を豫想することが出來、この無理數が有理數と相俟つて連續的な實數を豫想することが出来る。然しさうは云つても實數は無理數の成立を俟つて始めて可能であり無理數は實數に於いて求められることは先に示した如くで、片方のみを考へて居ては永久に解決することが出来ない。無理數や實數は實に斯んなものであつて、實に無理數・實數・連續等の聯關を考へて始めて理解することが出来るのである。

是にデデキンドの定理をもつて來よう。

定理『實數の切斷は下組と上組との境界として一つの數を確立する。』

切斷に依り $A \cdot B$ の兩組が與へられた時、一つの數 S が存在して S は A の最大數 又は B の最小數であり、前の場合 B に最小數なく、後の場合には A に最大數がない。最初から S を取りそれを境界として切斷 $A \cdot B$ を作るのではなく、反對に $A \cdot B$ の組がある時それに依つて S が決定されるのだと高木貞治氏は彼の著の中に云つてゐる。これが實數の連續性である。更に引き續いて次の様に示された。大小の順のある所には切斷が可能であるが

切斷には次の三つの型がある。

- ① 下組に最大数あり同時に最小数が上組にある。即ち飛躍がある。
- ② 下組に最大数なく同時に上組にも最小数がない。即ち途切れがある。
- ③ 下組又は上組に端(最大又は最小数)があり他端にない。即ち連続してゐる。

實にデデキンドの定理は③に限ることを示してゐる。自然数の場合は①の型であり、有理数では②の型である。例へば $\sqrt{2}$ より大なるものを上組、小さいものを下組とするならば、有理数にふれないで終る。然し無理数を導入するとこの様な切斷は出来なくなる。實数の體系に於いては切斷の切れ目には必ず實数がある。それが實数の連続である。(解析概論)

斯様な切斷による定義は数の分布の稠密性を示してゐる。然し新たな数を作るとか、新たな数が切斷に對應すると云つたのでは甚だ不明瞭であるには違ひない。我々は有理数・無理数を實数として一つの範疇に入れるのでありこの範圍で連続が成立するといつたが有理数が個々別々の一つの有理数なるに反し無理数が有理数全體の切斷として定義されて居る様にも思はれる。三つの異つた段階にあるものを一つの範疇に纏めることは論理的に不純なるを免がれない。そこで次の様にも考へられる。「實数としての $1/\sqrt{2}$ と單なる有理数としての $1/\sqrt{2}$ とを區別して有理数列の切斷を作つた時、下組の最大数が $1/\sqrt{2}$ になるか、上組の最小数が $1/\sqrt{2}$ になればこの切斷を實数 $1/\sqrt{2}$ と定義する。更に無理数としての切斷と同型にせんが爲にこの $1/\sqrt{2}$ を除いたものとする。即ち $1/\sqrt{2}$ より小なる有理数よりなる下組と大きいものよりなる上組とから作られる切斷を實数 $1/\sqrt{2}$ とする。」勿論斯く考へたからとてより完全なものでなく、前者も後者も一長一短を持つてゐる。更に切斷を一般的に考へるために下組のみを與へれば上組は自ら決定されるから、下組のみを取つて之を定義すれば一層簡單である。下組をとつて定義すれば、

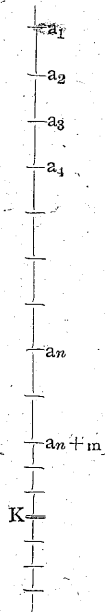
- ① 之に屬せざる有理数がある。故に之は凡ての有理数ではない。
- ② 有理数 x が之に屬すれば x より小なる凡ての有理数は之に屬する。
- ③ 有理数 x が之に屬すれば x より大なる有理数にして之に屬するものがある。即ちこの群中には最大の有理

数がない。

ラッセルは以上の三つの性質を有する有理数の集合を有理数の segment と名づけた、これ自身實数なのである。」と。(數と連續の哲學)

更にカントルは次の如く定義したと説かれてある。無限に續く有理数の列

が假に有理数 K に限りなく近づく時左圖の如くなつて



要素となり得るから、連続の定理がカントル・デデキントの定理とよばれるのも故なきことではない。しかし分布の稠密なる體系は經驗に依り盡く實證せられるといふことはない。従つてその要素は思惟の領域に於いて可能なるものである。その極限要素は本来 *ideal* なものである。思惟は直観の發展であり、直観は思惟の基である。この両面が具體化されたのが連続的體系である。それ故分離的要素が集つても連続は形成されない。連続は斯の如き理想的極限要素に依つて成立する以上實數そのものの生成過程を内面的に豫想して居る。極限要素は直観の統一であるとも云へる。無理數も是では判つきり直観の統一の數體形に於ける最終のものであることが分る。個々の弧立的な要素の集合は連続とはならない。而も連続の缺くべからざるものは同質性、即ち何れの部分をとつても異つた構造を示すことなく同様の構造を持たねばならぬことであつて、實に同質性の要求こそ連続の缺く可からざる要件である。是でその極限として微分、又連続體系として無限といふことが問題になつて來たと思はれば有限にして而も同時に無限に小なるといふことは如何なることか。變數とは dx dy の集合と一般に解釋せられて居るが以上の事を考へると變數は單に値の變化するものをいふ考へは非常に曖昧となる。今日我々は微分を次の様に規定してゐる。

その函數 $y=f(x)$ が興へられて居る時二つの値 x x_1 に對應する値を y y_1 として、
 $x_1 - x = \Delta x$ $y_1 - y = \Delta y$ と定義する。

然る時

$$\frac{\Delta y}{\Delta x} = \frac{y_1 - y}{x_1 - x}$$

は x と x_1 の間に於ける y の平均變動率である。 x を固定して $|\Delta x|$ を限りなく小にする時

$$\lim_{\Delta x \rightarrow 0} f(x) = \frac{\Delta y}{\Delta x}$$

なる極限を考へこれを dy/dx とする。結局

$$\frac{dy}{dx} = \lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{f(x+\Delta x) - f(x)}{\Delta x}$$

で示される。此の様な極限値を微分と云ふ、有限の量 x y はかゝる dy/dx の總和である。微分 dy/dx と云ふのは、 x がある實數の集合を示し、それに對應する實數の集合 y が定められて、或數 x とそれより少し大なる $x + \Delta x$ なる二數を取り、

$$\frac{f(x+\Delta x) - f(x)}{\Delta x}$$

の比を取り、この $|\Delta x|$ を限りなく小さくした時の極限である。それ故 dy/dx の比を取りて始めて微分が意義を有するものである。この無限に小なるものは存在する *Real point* ではなく、思惟する所に生ずるものである。無限小と云ふ概念は有限に對する相對的なもので、思惟の過程の中にある連続は斯かる思惟の綜合である。斯様に微分は直観の統一である。 $\Delta y/\Delta x$ の極限が dy/dx であるから、 dy/dx は當然實數の連續體系の中にあり、之を豫想するものである。此の考へは必然的に思惟の過程の限り無き事を示すもので數の分離的集合の上には考へられぬことである。微分は前述の如く、固定的なもので無く、直観的統一として思惟の *process* を示すものである。連續的體系の極限要素も同じ意味である。ただ微分が極限要素なる數の差の比に相等するもので、數連續は微分より成立すると云つても過言ではあるまい。更に我々は無限に小なものとて微分を一點と考へ得る。然し之は單なる點ではなく、*tangent* なる方向を有する點である。此の事は非常に重要な事であつて、かゝる點こそ方向を有する動點として連續を形成し得るものなのである。連續は個々の獨立した點の集合でなくて、その基に直観的統一がなければならぬと云ふ要求が此の零ならぬ無限小の微分と云ふ考へを生ぜしめたので、此の様な點の内面的な思惟の統一即ち内包的統一が連續を形成するのである。それ故單なる量的單位即ち外延的量的集合が連續でなくして内包量の性質的統一として連續が認められる。内包量の特徴は實に全體の中の一を考へるものとして全體に對する一の全體を形成せしむる性質的な所にある。此の點を理解すれば總和を求めることも理解され得ると思ふ。又此の様に考へて來ると無限とは如何なるものか 理解出來ると思ふ。今一つの自然數を a と考へる

$$a, a + \frac{1}{n}, a + \frac{2}{n}, a + \frac{3}{n},$$

$$a + \frac{n}{n} = a + 1$$

なる實數の系列は n に依り如何程でも多くの要素を含むことが明らかである。然らば

なる極限は如何に考へられるだらうか。 $a + 1$ は此等の系列の近附きを得る極限として存在する。數の連続はかゝる無限の系列であり、而して $a + 1$ はなほ幾等でも大きくなることが理解される。斯して見ると益々つきりと連続が解明されて来る。

然らば斯る連続は時間空間と如何なる關係にあるだらうか。時間は對象の繼起・並存の關係を示すものであつて思惟と獨立ではなく、數の系列と一致する所が多い。時間の繼起は勿論過去をも意味するが過去をも含む未來的なものである。自然數の場合に戻つて見るに $n + 1$ が可能なる爲に對象 A を非 A 、そして $A \cdot$ 非 A の全體として B を……等兩者が矛盾的自己同一の形式に於いて發展することを示した。 $n + 1$ の何れが 1 で他が何れかは問題ではなく、兩者は互に交換せられるものであつた。然し二つのものである以上、何れかと先に思惟せられねばならぬ。順序の差異に依つて區別せられた 1 に他の $n + 1$ が添加されて生ずるのが 2 である。 2 は 1 の後に生ずる。此の様にして發展した數の系列は時間の本質である繼起並存の關係を示す。即ち數の意識的發展の順序の關係を具體的になしたものが時間なのである。時間に於ける瞬間々々は實數の連續體形の中の基本要素と同じ關係を示すものである。具體的な時の流れは實に數の連續體形と同じ様に無限に過去から未來に通ずるものである。勿論數はそれ自身變數としての性質本有する。函數は二つ以上の變數を具體的に關係づけるものであるから、個々の數は函數の定立に依つて具體化されると云ひ得る。古代には數と量とは一致して居た。量は確かに數自身の性質を持つて居る。量全體は確かに部分より成立して居る。數は内包的なものであると前述したが、量に於ける部分は全體ありての部分であり、全體は部分ありての全體である。量は數連續と同じ様に内包量であり外延量ではな

い。數連續は微分原理より發展した内包的なものであり時間はその生成を數の背景として考へられる。この内包的時間を認めてこそ外延量的な測定的時間も可能となる。勿論外延量として認められるものもその奥に根柢に於いて内包性を豫想して居なければならぬ。斯して測定せられた時間が並置の關係として思惟に依つて具體化され、客觀化されると、そこに空間が生れる。此の量的な空間は更に時間の繼起並存の關係に於いて無限の體系に思惟せられる。空間は吾人の働く場所として時間的なものを含み、時間も又空間的なものを含むに至る。かやうに連續時間空間は密接な不可分の關係を有し兩者とも直觀の統一に依り、即ち微分の原理により發展するものである。然らば此の兩者の體系中に於いて運動とは如何なるものであらうか。空間の體系に於いて一つの點から無限の距離に無限の方向に進むことが考へられる。この様な進行を時間の函數と考へ、運動と名づける。體驗せられる時を客觀化すれば時の體驗を含むことになる。この兩者の客觀的な分離が一方に於いて空間的系列、他方に於いて時間的系列となると考へられる。この時間と空間を融合したものが運動に他ならぬ。故に運動を單に經過せられた或は經過せられる量の外延量として考へ、その奥に秘む内包的性質を考へないのは運動の本質を辨へざるものと云はねばならぬ。經過せられた個々の點の集合として考へることは餘りにも大きな誤謬である。點は飽途 tangent なる方向を荷ふ動點である。運動をして經過せられた個々の點の集合と見做すことはその點を固定したものと見做すことであり、又單に全體を分割した個々の點であるから、かゝる點の集合は靜止の集合である。 Real point となつて Ideal point とつのみ運動は可能である。

(III)

以上大體數の認識から始めて運動とは如何なるものか考へて來た。この考へをもつてゼノンの運動否定論を批判して結論を出さうと思ふ。

① 先づ第一の問題から考へて見よう。

先に無限に小さい點に對應する時間が無限に小さくなると考へて行き詰りを生じた。事實運動を理解するには時間と空間の對應として考へていゝから、この兩者が無限に多くの要素から成ると考へていゝ、然しゼノンの論から判斷すれば、 A から B に達するには無限に多くの點を通過せねばならぬと考へて居るが、それ等の點を

Ideal point と同じではなく Real point として考へて居る。而るに AB は連続體でなければならぬ。無数の多くの點を一々指摘するのは不可能なことに屬する。ゼノンは運動を Real point の綜合として考へてゐる。Real point の綜合としては運動がなりたないことは先に示した通りである。運動をゼノンの如く解釋すれば、ゼノンの論法には誤りが無い。誤謬は實に運動の解釋に存するのである。斯の様に考へて來れば②は①と同じ傾向の問題なる故最早論ずる要はないだらう。運動を Ideal point の綜合と考へれば、出發點に於ける差は解決することが出来る。そして現實の問題と何等矛盾なく説明し得る。

次いで③の問題に移らう。第一に飛んでゐる矢の瞬間々々を指摘することは不可能と云はねばならぬ。無限に多くかゝる點を取つて考へることはそれ自體既に Real point と同じでなく Ideal point として考へて居ることを豫想してゐる。測定された時間、空間として連續體を考へることは直觀の統一、微分原理より發展する内包的統一を認めなければならぬ。又静止を示すにはある有限の時間に於いて一定の位置を占めて居ることを示さねばならぬ。ゼノンでは各瞬間々々は無始無終のものとなつてゐる。斯様に考へた個々のものの綜合では運動は理解されない。時間に於ける瞬間を數に於ける微分と相應して考へ、空間に於ける點を數に於ける微分點の如く、方向を有する動點としてのみ、矢の飛ぶことが理解される。實に運動は直觀の内面的統一である。今再びこれを痛感する。又先に示した時間が無限に可分せられる不都合を論じたといふ考へは次の④の問題と共に考へよう。

B₈がAを通過する時間はCを通る時間の半分でなければならぬと云ふ考へは、アリストテレスの云ふ如く、相對運動を辨へぬ兒戲に類したものと今日では考へられるが、ゼノンの本旨はそんな處には無いのだらうと思はれる。B₈がA₄からA₅に移る瞬間に於いてC₁をも通過せねばならぬから、一瞬が又他の一瞬を含み、不都合だと云ふのが本旨であらう。この考へは③の問題に於いても示された所であるが、瞬間々々をゼノンは個々の獨立したものと考へるから運動が理解出来なくなるのであつて、結局の所、ゼノンの論は論法に誤りがあるのでなくして、實に運動そのものゝ理解が誤つて居るのである。それ故若し運動をゼノンが示す如く考へれば運動を否定する結果に落ち入らざるを得ぬ。

斯様に我々はゼノンの運動否定論を批判するに際して、斷然ゼノンの前提を否定することが解決の道である。

以上甚だ不完全乍らもゼノンの説を否定した。蓋し認識は事實に立脚して働き、そしてその働きを統一して見る處に完全さがある。働くことを見ることを空間的時間的に捉へるなら、其處に立脚してこそ認識は認識たり得るのである。自己を世界の中に否定してこそ、新たな創造の天地が開けて來る。數理に於ける行爲的直觀は實にかゝるものである。吾々は此の行爲的直觀により經驗的事實をも客觀化し、發展せしめることが出来る。經驗以前にアプリアオリを豫想する、この事が緊要である。數理は斯様な行爲的直觀に依つて論理的に發展することが出来るのである。

參考書主なるもの次の如し。

解 折 概 論	高 木 貞 次 著
科 學 と 價 値	ポアンカレ 著
數 學 と 數 學 史	末 綱 恕 一 著
數 と 連 續 の 哲 學	白 石 早 出 雄 著
數 理 哲 學 研 究	田 邊 元 著
西 洋 哲 學 史	大 西 祝 著
零 の 發 見	吉 田 洋 一 著

永劫回歸説に就いて

長谷川 孫一郎

「私は何者も私の仕事の一部を私の肩から取下して呉れる者が未だ私の爲めに現れ来ざるを悲しむ。明らかにこのキデマンの本はさうではない。此の本は悉くツアラトストラの思想を以て語るに終始してゐる。」(書簡)

これはニイチエが彼を讚美せる或人の書をニイチエの妹夫婦が送つた時、彼等に答へた言葉である。
私は此の語を想起する毎に此の小論が彼の云ふ「ニイチエの手足」に過ぎず、又、唾棄すべき「ニイチエの思想の猿」たる域を脱し得ざる事を惧る。更に亦「余を失ひて自己を發見せんことを命ず。汝等凡て余を拒むとき、余始めて汝等に歸り來らむ。」(布施の道)に對するに、如何に私才の卑小にして、この血を以て書かれたる書を解するの資格を有するやの自責の念の切なるものがある。

併しツアラトストラの思想の私の理想に同感を與へ、私の愛の深い限り、私は私としてのツアラトストラを解明し得んことを思ふ。

私が五年前に生とその意義に對する疑惑に對し雜措なる考察の結果、理想人一人としての全能力を有する非凡なる凡人の欣求を以て「世非無常」の神秘的假構の上にこれを求めんとしたことが、それより二年後にして始めて「ツアラトストラ」に接し、大なる同情と自ら足らざる表現に暗示を得たと信じて以來、一層信愛の情に堪えず、今特にニイチエ及びツアラトストラの恐ろしく難しい永劫回歸の思想に對して考究したき欲求が斯論を書かした所以である。

一、「ツアラトストラ」の概括

ツアラトストラの抒事詩人ニイチエの傳記に就ては言を憚る所であるが「ツアラトストラ」の要旨は「超人」の代辯者として又「超人欣求の豫言者」としてのツアラトストラの教説(思想)と運命(體驗)を藝術的(特に韻文的に)文章を以て描かれた歴史である。

十年山上の隱者として「精神と孤獨」とを享受した彼は其の溢れ來る人間への愛と悟道の「蜜」の爲に下化し分たんとし、その途上「神の死せる」を未だ知らざる老聖者と笑ひ合ひて別れ、町に入つて「超人」と「禽獸より超人への橋」としての人間の「超克」せらるべきを説いたが、群衆はむしろ人間退化の表徴としての「末人」を欲してその卑小に甘んぜんとした。更に彼に報ゆるに憎惡の眼を以てし、彼の伴侶として残つたのは死骸に過ぎなかつた。併し彼は「活きたる創造者」としての伴侶を求め、矜持と智との象徴としての鷲と蛇を以てせんとを誓つた。(序説)

「斑牛」と呼ばれる町にて彼は「超人」の創造力とその發展につき述べ、所謂賢人の禁欲の教や後世界信者・侮身者・虚無主義者を批判すると共に「新しき徳」の希望として、闘争心を最善であり「生への愛」を強調して現在の地獄たる虚偽(偶像)——國家・教會・群衆の市場等——を去つてむしろ「孤獨」に歸る可き事、同情・隣人愛の欺慢と墮落より眞の女誼と遠人愛を、老婦に會ひ女への道(鞭)を示され、惡に報ゆる道・自由死(生者に利益と誓約となる)を説き「超人欣求」の障礙とし古き價値の轉換を説き後、彼は徳の本質と「與へる者の道を説き、又彼の洞窟に歸つた。(第一篇)

ツアラトストラは夢に彼の教説の誤解されて居るを直觀し再び下化して社會主義の平等觀を以て下劣なる群衆本能を煽動せんとする「火牛」の正體を究め、かゝる世界の「救済の道」の至難にして「永劫回歸」の「長き薄明」の豫感に惱み「至寂の時」の聲なくして語る者との對話に勃然と苦痛と別離に悶泣して「孤獨」の山に分入つた。(第二篇)

その後彼は漂泊と登山により體驗を積み、「偉大なる海」への孤行を以て旅より歸るため山を越えたる時、初めて「永劫回歸」を布教し、四日の航海の後全ての苦痛を克服し、上陸後その國の小化せる人間を見て又、「大都市」の門に於て痴漢「ツアラトストラの猿」の唸聲に不快の念を起して「最早愛すべからざれば——通過すべきで

ある」と孤獨の洞窟へ「歸省」した。そして「永遠に對する肯定」と「啞喞」の語を讚美して漸く永劫回歸の思想に堪へ得るが如くなつた。(第三篇)

山上の洞窟に多年月を過した老ツァラトストラは悠然と没落の期を待つて居た。或時「凡情」を餌として高山の頂より「逆なる癡人」―天才―を釣らむと憐憫の情に驅られて七種の超凡者(虚偽に倦じ逃れた二王、良心鋭き徹底者、悔悟者の苦を摸し又其れに同化しつゝある妖術者、退職の法王、神を殺した極醜の人、自ら選べる乞食、疲れたる漂泊者ツァラトストラの影)を見出し彼の洞窟に招じ入れて、彼は獨り山中に更に高き者を求めて消遙し、木の下に午睡の時「永劫回歸」の思想に魂を吸入させる日を憧憬して、超凡者に晚餐と酒とを供し、平癒せる彼等の談話に悪臭を感じ、彼等を伴ひ月明の夜に出て陶酔歌「あゝ人間よ心せよ」以下の歌を歌ふ。併し彼の理想は幸福に非ずして事業(鬭争)、夜の醉歌に非ずして「大なる眞晝」の自己犠牲なる故、同情の躊躇を克服して東天紅の太陽に呼びかけ、

「いざ獅子は來た。我が兒は近し。我が日は始まる。今こそ！ 汝大なる眞晝よ」と呼び山を降り、暗山より昇る旭日の如く没落の道に出發する。(第四篇)

以上は私の見た「ツァラトストラ」の大略であるが、此れは全く本文に沈潜した産なることを附記して置く。即ちツァラトストラは超人の説を退化し行く群集なる人間に説き、幾度か誤解と迫害に苦みつゝその手段としての古き價値の破壊を説き、その間永劫回歸の思想と大なる眞晝の燃焼に苦み悶へ遂に克服して(啞喞)行くが如く見える。しかしこの二思想の葛藤に就いては遂に結末を語るに及ばず只憶惟による外はない。

二、「ツァラトストラ」の諸問題

ツァラトストラはその難解なる故に幾多の問題と誤解を残して居る。今その難解たる故に付いて阿部次郎氏の解明は最も適切と考へる。即ち、要約すれば、

第一に此の文章が「箴言」を以て語られる故にその思想が「嶺たるべきもの」であり、「暗誦さるることを欲する」故に「嶺から嶺へ」最短距離を行くに堪える「偉大にして長身なることを要」するからである。

第二には「その思想の餘りに熱烈」なる故に、其の火に燒かれざる平靜さと明晰さを要するからである。

第三には「殆ど如何なる言葉の背後にも『最高の自己征服』が個人的體驗が隠れて居」るからで、同一の體驗を要するからである。

第四にはその言葉が「一語毎に矛盾する」からであり、その両面を見て統一を導く鋭敏なる感受性を要すからである。

而して表はれとして私はその中心に次の問題を残して居ると考へる。即ち「超人」の問題と「永劫回歸説」、及びその統一として未完の「大なる眞晝」の問題があるが、此等の問題の前提として「權力意志」、その外に「價値の轉換」がその全てであらう。

文の表面によく表はれたる「價値の轉換」は古き價値(彼岸思想と壓世主義乃至形式的善惡觀念・恩寵的なるキリスト教の慈善・同情と隣人愛や専門主義的天才・教養)に對して新しき價値(創造力・強烈・偉大)を以て換へ、偶像(教會・國家・社會及びそれ等の倫理其他)を破壊してむしろ「自由精神と孤獨」を以てしたと見られる。

永劫回歸説以外の思想に付いては、永劫回歸説に直接的關聯をなす時にのみ觸れる。

三、「永劫回歸説」の成立と論據―超人より―

「超人」は現世を其のまゝに肯定してその存在を聖化し自己の精神的自由と他人の救を窺くするものである。善惡・大小其他の人に關する事一切を包含し、産み育て死滅させるに足る廣さと厚さを有せねばならぬ。

換言すれば「地の意義を全くし未來を正し過去を救済」(阿部氏)する者、「永劫」の世の「生」「瞬間」を價値づけ又小化し卑化する「忌はしく嘔吐」的人間の流れを受容しつゝも「自ら不純となるなき大洋」でなければならぬ。

然らばこの小人の流れ現世と過去をその悲痛と慘苦を藏した生を如何にして受容し肯定し得るか。

「ニイテ」及「ツァラトストラ」の詩人的素質が神祕的直観によつて内的經驗となつた、彼の教説中最も怪奇にして深遠なる「永劫回歸説」は恐らくこの間に答へん爲に又此のこの問を生ぜしめんが爲に感得されたものと考へられる。阿部氏の「解釋並に批評」に「人生が如何に痛苦と滑稽に充つるもこの生を除き遁竄すべき『生』

はない。故に此れに向つて邁進し活路を前面に拓かねばならぬ」云々と述べられて居る。永劫回歸説はこの「活路」として、「現世」の真相を體得し、印象して「是の如きが人生なりしか、よし今一度」の勇猛心を以て此れを肯定し更に熱愛してその永劫に回歸せん事を意欲するのである。そして悲痛に充てる過去と現在のあらゆる繫縛を超克して精神の自由を獲得するのである。

そして永劫回歸説は何ぞ。

それは一切のものは永劫に回歸するとす。一切事物が過去にありし如く、再び嚴密に、元の状態に回歸する。第三篇「幻影と謎」に於て「瞬間の門」の傍にツアラトストラが「侏儒」に語る言葉、「此の思想に面して悶絶して後漸く床上に起き上つたツアラトストラに従ふ蛇と鷲が代辯」する言葉は之を述べて居る。

翻えつてこの説は如何なる目的に説かれて居るか。即ち「この超人の道への一大障碍として汝を鍛へて超人と爲さん爲めの鐵槌」とし、超人とならん爲めには「人生の慘苦と矮小とを以て永劫に回歸する」この苦痛を嘔吐を克服せねばならぬ。故に「この障碍を超えて鐵槌に堪へんことを學べ」とツアラトストラは云ふのである。更に云へば「超人の試金石」とし此れが超人と人とを分つ即ち滅亡する者と生に入る者とを分つ試金石である。超人たる者は一切に對する「よし」と云ふ勇氣を要する。過去に對する痛恨（慚愧、慚愧、慚愧）これが人間の一生である。は我等は如何とも爲し得ぬ。故に此の世に對する不満により呪咀せる、之れが復讐精神の根本動機である。過去に拘泥する限り未來及び現在の意義を全くし得ぬ。解脱について」に於ける彼の言は過去の刑罰より解放され意欲せんことを「嘗てありき」を「一切は去るに値する」故に「かくあらんことを意欲すべし」、即ち「背向して意欲」、過去の意義の存する處を説いて居る。

併し重要な事は後にも述べる如く如何にして「嘔吐なる哉、嘔吐なる哉」を解脱したか。これは「運命への愛」を以て嘔吐を克服し、卑劣なる厭世主義の敗北に對しての勝利である（これ等は主として「ツアラトストラ」の言葉と阿部氏の「解釋並びに批評」中のニイチェの他著、書簡の言葉を基とした）。

四 「永劫回歸説」の批判

(一) 宗教思想との矛盾

阿部次郎氏「ツアラトストラ解釋並に批評」及和辻哲郎博士「ニイチェ研究」中に於ける批判又其の他の論説を中心として幾多の問題を批判すれば、大體に於てその疑問は「回歸を意欲すること」と「運命の意義を認めて肯定」することは即ち「背向して意欲する」ことは必ずしも同義ではない。又同一物の回歸の論理的必然性の如何に關するものである。この點を後に詳述したい。

前者に於て必ずしも回歸の説によらずとも我等の意欲を「新しき未來」に集中してその到達への必然的段階として其の過去の痛恨と復讐を征し、「運命としての過去を肯定し愛し得る」如くなると思はれる。例へば佛教等による彼岸の思想の如く、彼岸への準備として苦痛・罪業を肯定（むしろ諦觀）し愛し得るではなからうか。しかし此等は現世以外に生を認めぬ故に許容し得ざる處であり、又魂の輪廻すべき六道の存在も彼の世界觀に矛盾する。

現世を唯一の世界とする彼は（「背世界者」「死の説教者」にも見られる）我等といふ同一物の變化するに堪へざる程にこの生をこの瞬間を惜み永劫に回歸する程に熱愛する（「瞬間の門」）そしてその是非に付き後述するも此處に無限と有限の一致、轉生と進化及存在價值との一致として彼の心理的根據が見られると思はれ一種の科學的宗教（信仰の科學への退歩ではなく）とさへ思はれる。

後者に於ては彼は「超人生起」の爲に永劫を意欲する。その必然的論據及矛盾については前にも後にも述べざるがこの二者は共に瞬間を重んじ愛することよりしては彼の瞬間の輕視者（その横着と懶惰）を防遏し、あらゆる瞬間に全責任を以て生活し行爲すべき事を銘記せしめんとした事は、當時の基督教、他力宗教、厭世思想の卑劣なる隱遁に對する追責である。そして此れが「權力意志」——生に對する力（即ち自己そのもの）——を最高價值とするニイチェの愛であり、その剛側なる生への肯定は欲求は懷疑の諸段階を経て來た者にもみ許され、そして自由・快活・高貴・強烈に依る彼の新しき宗教があるのである（和辻博士）。

(二) 實踐的論理的矛盾

「ジンメルが云へる如くカントの空間的に『汝の行爲の準則を普遍化せよ』と云へるを時間的に表出したのがニイチェの卓見である。」（阿部氏）

併しこの「準則普遍化」と同様なる眞理を有するにしてもその當爲を實在化せんとしたこと果して（萬物がそのまゝに回歸すること）が眞理なる乎又、換言するならば永劫回歸説が果して論理的必然性を有するや（それが我等の使命であり欣求するものであるにしても）。

阿部氏はこれについてジーンメル氏の説を引用して次の如く述べて居る。即ち「回歸が其の意義を有するは、過去より未來に通ずる一續きの自我の異なる時期に於て繰返されねばならぬ。そして此の自我が新しき經驗として意識的に再生し深めらるることより感ずるのである。同一の對象が回歸する時、現在の自我の内容と組織とは既に過去のそれと同じではなく、しかも其れが繼續しつゝしかも同一ならぬ自我の上に繰返されれば三度は二度よりも深刻なる意識を有す。しかしツァラトストラの思想の上では一回と二回との自我の二つはその間に何等の連絡も相違も無く、前世の記憶も附加されずして遂に回歸は實質的意義を有し得ぬ。亦人生は一度あつて二度なく無常のものであり回歸せられる自我は全然我が生の關知せざる他の自我にすぎぬ。そして現世の生が未來の我等自身の分身の運命を決定するとしても、それは又過去の生が決定するので現在の生の力によるのではなく、彼の希望せる實踐的歸結も永劫回歸より生じて來る事は覺束ない」そして「彼が彼の刹那を愛する事に溺れて刹那の體驗を與へる主體……繼續せる自我の永遠を考慮するに粗大にすぎたのであり」と云つて居るが斯論は和辻博士其他の説の歸結と同じく「回歸説には刹那的體驗の原子論」即ち宇宙に於ける自己の生の力の數は一定であるがその活動性は永久的なるが故に常に創造的であり、常にその瞬間は新しい（かゝる事を意味する如く私は考へる）といふ一種の機械觀的假想とさへ云ふべきであるといふ。物が先入傾向としてあり、此れを矯正すれば（即ち永久と創造との同一回歸の矛盾を矯正すれば）同一の體驗の永劫回歸を説く譯には行かなくなるであらう。そして「我等の運命の回歸の度に新たなる生を營むと解すればその外形（必然的に内容との矛盾）のみを保持し、反面佛敎の輪廻思想に接近」して此處に至れば（二）に於ける矛盾を來すであらう。即ちこの精密なる論の示す如く實踐的論理的妥當性は見出し得ぬ。併し此れのみを以て此の説を否定し去り得ようか。天才の言は一語に矛盾する」（此れにつき後述する）。

(三) 物理學的生物學的矛盾

更に前述の「刹那的體驗の原子論」の矛盾及「同一物の回歸」をエネルギー恒存の法則を以て根據としようとしても必ずしも有限なるべき權力意志の活動力が無限の時間の中に同一配合を繰返す事はむしろ偶然に近くその事は數學的に明らかである。

亦生物學的に殊にニイチェが影響を受けたる事の多しと考へられるダーウキンの進化論によつて見ても、即ち進化論的に見れば生の肯定の意義を「唯一の世界としての現世」に於ける我一個の人格がその内容を常に「新しきもの」として轉化し進化し輪廻する段階として肯定し過去の意義を是認するが同一物の回歸を有するといふ點に矛盾を生ずる。

以上を以てしても「永劫回歸説」は極めて矛盾若くは破綻に満ちて居ると云ふべきである。しかしこれを他の立場より證明すべき契機を見出し得ぬか。即ちその眞意義を次に求めようと思ふ。

五 「永劫回歸説」の眞價の考察

(一)
永劫回歸説は其の歸結として幾多の矛盾と破綻を來して居るらしく見られるが、何れも難解なる故にその率直なる考察に不安を生ぜしめる。故にその解明の手段として「ツァラトストラ」の創作者ニイチェの思想と運命をその傳記と他著作・書簡・手記の中に求めねばならぬと思はれる。併しそれにも増して必要なのは「ツァラトストラ如是説」中に於けるそれ自身について忠實に最檢討することを要すると思ふ。それにより眞義を考察し眞價を求めたいと思ふ。

先づその最も關係深き各章を概観して見たい。

第一篇「至寂の時」に於て全く孤獨に歸つたツァラトストラは「聲なくして語るもの」との對話に於て「永劫回歸」の思想との苦闘—嘔吐すべき矮小の人生の回歸に對する嫌惡—を暗示し此れに堪へ得る如く成熟せざる自己を「軟熟」すべく教育する要を感じて更に深き「孤獨」に歸りゆくのである。

第三篇「幻影と謎」に於て彼は「危に向ひて生きんとする人」に語る……「重壓の精神」なる侏儒が彼の内生の登高を逆げて「落下すべき」事を囁く。ツァラトストラは勇氣を以て「斯くの如きが人生なりしか、よし、今

「一度」と叫んで戦ひ「瞬間の門」に至る時「永劫回歸」に關する耳語に「刹那」と「眞理の彎曲せる永劫の道」——大の吠聲（過去の自己の想起）により——それはすべてを消失せしめた「重壓（永劫回歸に苦悶せる自己）の魔蛇を嚙切らんとすることに憧憬するのである。

「癒へ行く人」に於ては既に孤獨に歸着して居た彼はその中間の幸福と活力を無視して遂に「恐ろしさに狂人の如く」床上に跳上る時は來た。そして七日の病の後、彼の動物（鵞と蛇）は彼を慰めてその談話中彼に代辯して「一切事物の回歸」を説く。そして次第にその苦痛に堪へ得る如くなつた。そして、

「第二の踊の歌」「七つの印」に於て永劫回歸の肯定と欲求を唱ふ輪歌（おゝ人間よ心せよ―後述）と「何故に？おゝ永劫よ、我汝を愛すればなり」を絶叫するのである。

第四篇の「陶酔歌」に於てこの輪歌は繰返さる。こゝに於てこれを暗示するに留めて超凡者を連れ夜の中に入りゆくのである。

以上に據り見られるのはこの思想の克服に恐ろしさに堪へるまでに成熟して行くツァラストラが屢々人間愛に誘惑され又遂にそれを救済し又卑小なる人生の回歸を嫌悪から脱却して久遠と回歸を救済し嘔歌するに致るまでで終つて居る。そして此處に重要な役割を果して居る如く又その大略を暗示して居る如く見える「第二の踊の歌」の輪歌になほ多くの疑問と解かれざる解答の鍵を秘めて居ると思はれる。今此處にその全句を擧げ考察した

5。（括弧内はその譯）

Erst I "Oh, mensch! Lieb Acht!

（おゝ人間よ、氣を付けよ）

Zwei I "Was spricht die tiefe Mitternacht?

（深き夜は何をか語る）

Drei I "Ich schief, ich schief——

（私は眠りき、私は眠りき）

Vier I Aus tiefen Traum bin ich erwacht;—

（深き眠りより我は目醒めぬ）

Fünf I "Die Welt ist tief,

（世界は深し）

Sechs I "Und tiefer als Tag gedacht.

（そして生の思ひじより深し）

Sieben I "Tief ist ihr Weh——

（深きはその嘆きなり）

Acht I "Just——tiefer noch als Hergleich:

（快樂の深き事心の惱みに勝る）

Neun I "Weh schriest; Vergelt:

（嘆きは云ふ、消えゆけと）

Zehn I "Doch alle Lust will Ewigkeit——,

（されど快樂は皆久遠を願ふ）

Elf I "—— will tief Ewigkeit"

（深き深き久遠を願ふ）

Zwölf I

（——）

此の歌の解説とも見える「陶酔歌」に現はれたものを参照して見ると大略次の如きである。

(一) 此れは夜精「神祕に凄く情を籠めて汝に云ふ」の「久遠」の聲である。

(二) 「久遠」の眞理「深夜」は何を「超凡者」に語るか。

(三)(四) 久遠の深き想起—過去の生を告げる「古き鐘」は「愛故に深く？」鳴り渉る。

(五) 回歸の道、永遠の「一切の歡喜を口籠らせる」物婁き道。

(六) 久遠の回歸の眞理は眞畫の一切の誘惑（生への愛）より深し。

(七) その永劫回歸の肯定、如何に嘆き深きことぞ、その瞬間及過去の生をも含めてゐる。

(八) されど理想「超人欣求」はこの嘆きを超ゆべし。

(九) 故に世への拘泥生への愛の苦痛は一切消えて行け。

(一〇) 生の肯定「精神の自由」は「唯一度」を「二度更に多く」希求す。故に「一切の回歸を希求したのだ。」

(一一) (—として……)「大なる眞畫」の現出を希ひ？

以上詩としての解釋は私の主観より出でぬ。

(一一)

かくてツァラストラ及永劫回歸は何如なる價値を有するか。先づそれは哲學者ニイチェに如何なる役割を果して居るか。それについて主として多くの講評とする處（文献の名を忘却したが）を見る。そしてその要約は大體次の如く云ふことが出来るであらう。

第一に哲學の概念的偏見を是正せんとし認識の對象を「生」に置いた生命哲學者としての潤色ある實用主義的

傾向を有するニイチエの權力意志と共に個性ある人生愛に多く負はしめる所ある「瞬間」への愛惜とそれをして積極的に生を肯定せんとした勇猛心である（阿部氏の結論―併し此れは主として權力意志の強烈なる欲求「超人」―大なる眞晝より説くべきであらう）。又彼の眞の「貴族主義」の有する意義も又此處にあらう。

第二にはその構成上詩人としての神秘的直観とも云ふべき閃電的表現の功緻と熱烈さは藝術的哲學者ニイチエの論説に高次の感情を移入し理性のみならぬ人間・精神のみでなり立たぬ肉體を有する人間の實體をも解かんとしたのであらうと（ニイチエは理想主義者であり現實主義者である）。

(三)

最後に特殊哲學の立場と私観とを述べて結論に移行したいと思ふ。

第三に（否永劫回歸説の眞價として）述べねばならぬと思ふのはむしろ彼獨特の藝術的氣分―一種の憂愁（超論理的）さの有する事である。それは彼の直観に基く事は勿論であるが又此れが何故に生じたかその根拠をも含めて考へたい。

それは前に述べた如く、彼の自己征服と特殊なる體驗に基くのであり又他の獨自性（亦彼の難解と誤解を招く原因）の多くを生じた所由ではないかと思はれる。彼の自己征服については屢々觸れて居る故に略するが後者を具體的に述べれば、彼は此の書を書ける時は幾多の別離の悲しみが未だ胸に新しくして又、前半生の幸福より孤獨寂寥の時代に變りつつあつた時である。即ち彼は「同じ心を有する彼の任務の分擔者として」「精神の同類者」たる朋友と弟子を渴望して居た。故に此れを發見した時は「滑稽な程」喜んだが豫定されたる如き失望に際し（彼の一生は悉くかうであつた）その嘆きは如何ばかりであつたらう。

期待の裏切られ慚悔の自責、この古傷は容易に癒やされぬ、のみならず彼の思想の餘りに新しく餘りに高きが故に民衆も批評家も僧侶も―すべて彼を仇視した。此れに對し彼の鬪争心（道の爲に挑戦せんとする）は甚だしき憎悪と嫌厭の情を湧出させ「我が首を絞むるは要なき業ぞ！ 死ぬとや？ 否々我は之死なじ」と絶叫する勇猛心（「仇敵の間に立ちて」）。併し又彼の孤獨寂寥の甚だしき（むしろ此れが彼の本心であつた）それは彼の詩「寂寥」「秋風の歌」等に現れてゐるが私は此等を口誦む度に、そして彼の心事を推察する度に堪へ難き感動と斷

續する歎歎を禁じ得ぬのである。

永劫回歸の思想は彼の超人其他の思想と共にこの孤獨に對する反動として満たされざる欲求の現れとしての夢なのである。

故に永劫回歸説の基く思想は只論理的理念を以てしては考へ得られぬ深さがある。そしてこれを以てその神秘的の一切を解し得たと思ふ。私はこれを以て結論に導く事が出来やうと思ふ。即ち論理的に足らざる暗示的なものそれ自身（極めて非實證的とも思はれるが）大なる眞晝への欲求によつて矛盾を敢て理論付けたとした妄想（？空しき努力が彼の思想を深化すると共に破綻）が彼自らをも亦狂死せしめたのである。

併し残された疑問―單に此れを以て終れりとするのではなく「永劫」に解かれざる哲學問題の上に大きな暗示（むしろ東洋哲學的な）を與へんことを信ずるのである。

以上私の未だ甚だ物足りぬ―表現能力と無智により―感を残して居る事と尙一抹の不安を覆ふ可くもない事を告白する。

私の全能力を最大努力を注いでも尙ニイチエの弟子（乃至朋友）―後繼者若くはニイチエの超克者となり得ぬ事であらう。種と畠を異にする者、無私なる太陽の奇蹟的靈感の我が非力に新しき生命を興へざるよりは。

永劫回歸説はニイチエの傷ましき「ひねくれ」より來るものかも知れぬ。しかし決して偏狹なる獨善的なものではない。高次の理性を経て來つた深く大きく逞しき人間感情である。そして永遠に消えやらぬ夢である。

最後に云ふ、ニイチエを單なる狂死せる一哲學者とし、永劫回歸説を單なる妄想と解して止む者、安んぞ知らん―高き連嶺の閃きの深淵の底に影を潜めるを。

編輯後記

やつと發行することが出来ました。遅くなつて済みませんでした。原稿は例年になく澤山集つたのですが、何分人手が足りず、用紙其他の都合もあり九月の豫定がとうとう二月になつてしまひました。

原稿は、詩二十六篇、短歌二百數十首、俳句百餘句、小説六篇、論文十篇の多数が集りましたが、その中、詩六篇、短歌四十六首、俳句二十九句、小説、論文、各二篇を文藝部に於て選びました。

詩では、徳村君の『冬心』が一番よいやうです。山田君室伏君米田君も相當の出来榮え、横井君、豊かな詩才をますます發揮されるやう。伊達君、甘いけれど素直な態度を失はぬやう。

短歌では、米田君の『若芽』の中によいものが見られます。竹尾君、新しい歌境に進むことを期待します。鈴木君、表現の混雑は大きな缺點でせうが、一應のまともまりを見せた作。黒川君、船山君、清水君、目ざましい進歩を見せました。伊達君、畑尾君、未熟ですが、まっすぐに進んでゐるやうです。今後を期待します。不掲載の中にもよいものが少なくなかつたやうです。

俳句では、佐伯君船山君のものがすぐれてゐました。將來を期待してよい人達だと思ひます。山崎君、着實に進んでゐます。矢守君、破型であり乍ら正道を失はずよい感覺を生かした作です。松永君横井君根岸君、一段の努力を望みます。

小説では、文藝部賞の『鰻』が断然群を抜いて光つてゐました。描寫も正確でまっ満足出来る作品です。『頭痛』一應のまともまりは見せてゐるがまだま

だ未完成な点が多く、特に女の描寫は全然出来てゐないやうです。不掲載作品ですが、『さゝら男』『石油』の二篇はいづれも個性的な味のある作でよいものでしたが、紙面の都合上割愛しました。『襖面』『雪の街にて』の努力はみとめますが、表現の拙さはこの二作の大きな缺點でせう。

論文では、『ゼノンの運動定論に就いて』の數學の根本問題にまで立入つた精細な研究、及び『ツアラトウスのトラの永劫回歸説に就いて』の地味な勉強の大きな結實の二つを載せましたが、この他にも四篇ほどよいものが見られました。

ともあれ、終戦後最初に發行された北辰會雜誌としてはまっまっ一應の出来だと言つてよいのではないでせうか。

昭和二十二年三月五日印刷納本
昭和二十二年三月十日發行

第百五十六號

(非賣品)

編輯兼發行者 文藝部
印刷者 高橋覺吉
印刷所 石川縣金澤市高岡町九十番地
明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

